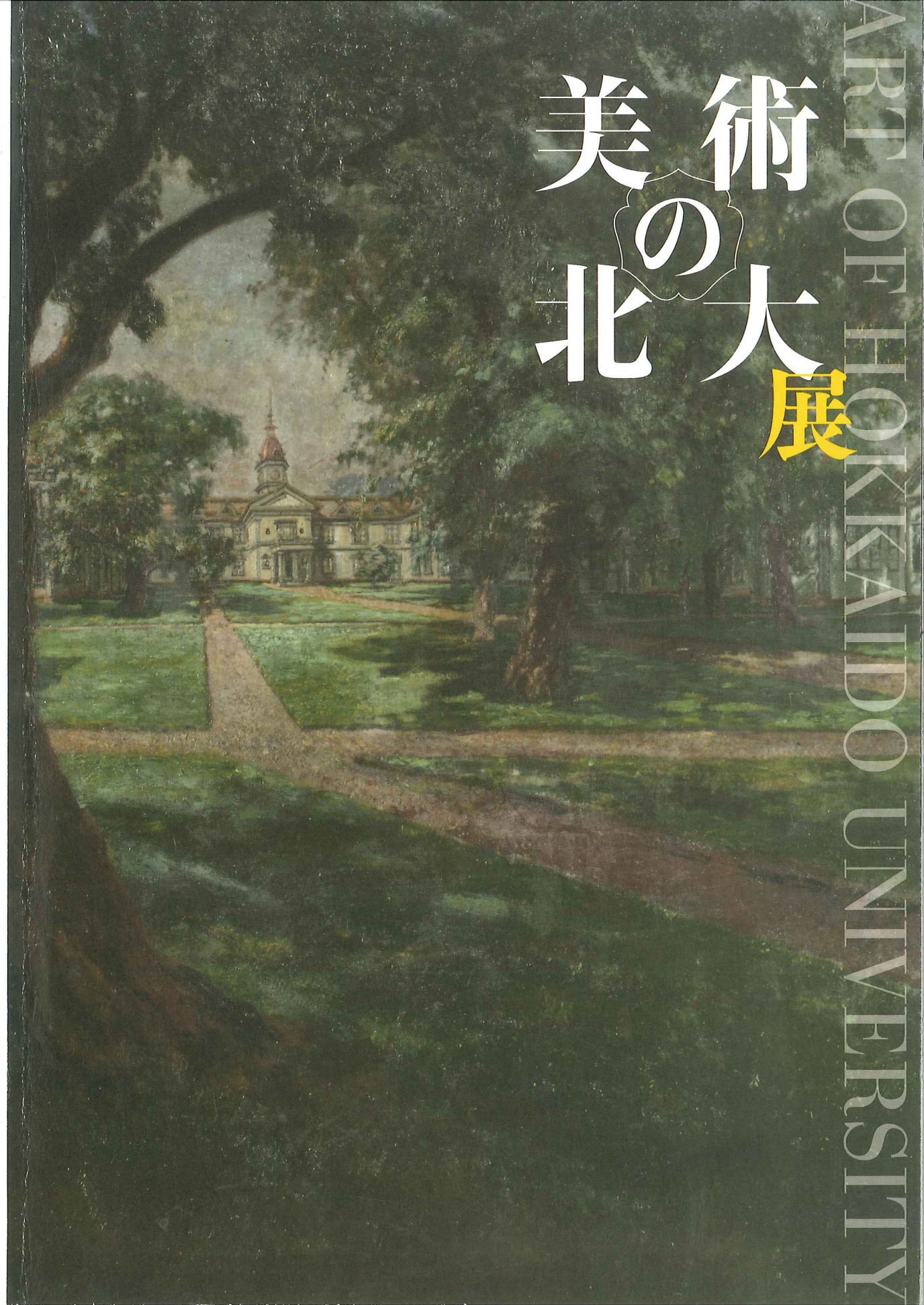




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	美術の北大展 いま、明らかになる大学所蔵絵画
Author(s)	北海道大学大学院文学研究科芸術学講座；北海道大学総合博物館
Citation	美術の北大展 いま、明らかになる大学所蔵絵画，4-80
Issue Date	2014-10-04
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61024
Type	book
File Information	201511041144.pdf





美術 の 北大展

ART OF HOKKAIDO UNIVERSITY

美術 の 北大展

2014年10月4日[土]ー11月30日[日]

北海道大学総合博物館 3階企画展示室

開館時間 午前 9時30分～午後4時30分 (10月4日ー10月31日)

午前10時～午後4時 (11月1日ー11月30日)

休館日 月曜日 (祝日および振替休日の場合は開館、翌火曜日は休館)

〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目(北大キャンパス内)

TEL 011-706-2658 FAX 011-706-4029

主催

北海道大学大学院文学研究科芸術学講座、北海道大学総合博物館

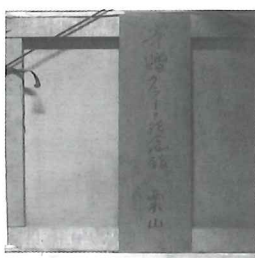
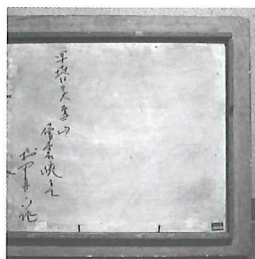
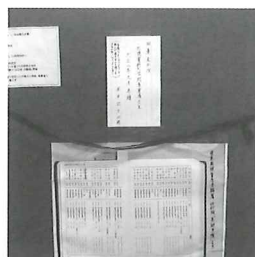
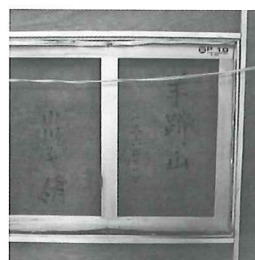
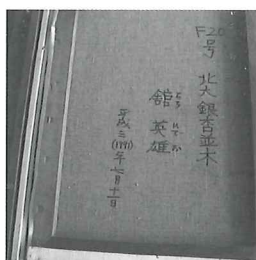
共催

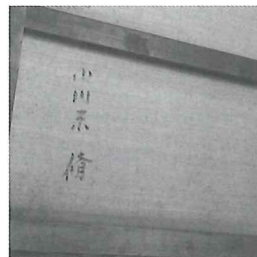
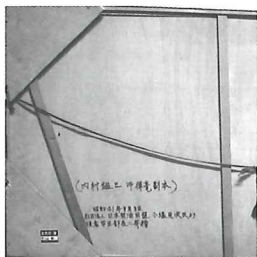
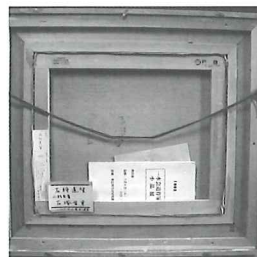
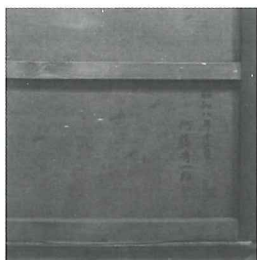
北海道芸術学会

後援

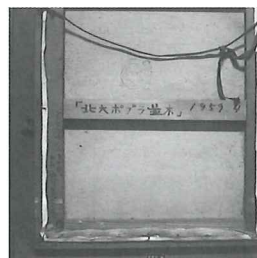
北海道、北海道教育委員会、札幌市、札幌市教育委員会、

北海道大学大学院文学研究科・文学部





いま、明らかになる大学所蔵絵画



ごあいさつ

文学研究科芸術学研究室では2011年度より教員、院生が中心となって、北海道大学がこれまでに収集し、展示、保管している美術作品の悉皆調査を実施して来ました。本展はその成果の一端として、本学ゆかりの人物が制作した絵画作品を中心に、これまで余り知られることのなかった「北大における美術活動」に焦点を当てるものです。

本学の固定資産台帳には、絵画や彫刻、書など美術作品として登録されているものが300点以上あります。また固定資産台帳に登録されていない作品が各研究室や部局等に埋もれている可能性もあります。それらを網羅的に調査し、「北海道大学所蔵美術作品」の存在を明らかにすることは、「北海道大学の文化的アイデンティティ」を確認することのみならず、北海道の美術活動の歴史や特質に新たな光を当て、芸術を通じて大学が地域社会に果たす役割について考察する機会となるものと思われます。

現在までのところ160点ほどの作品の現認調査を終えましたが、その過程で、中央画壇や北海道画壇でも名を知られた画家たちのこれまで知られていなかった作品を発見したり、全く無名でありながら優れた作品を描いている作家を発見したりすることもできました。そのような作品、作家を一つずつ、一人ずつ調査研究することには多くの困難を

伴いますが、院生を中心にその成果を展覧会という形で実現し、図録を編集してそこに解説文や論文を執筆し、ポスターをデザインし広報活動などにも携わることは、美学・芸術学や博物館学、ひいては人文科学の教育研究にとって大変に意義深いことと考えられます。

またその結果、作品の展示状況、保存状態などの点でさまざまな問題があることも判明してきました。本学に美術館相当施設や美術品専用の収蔵庫がない以上、こうした問題が一挙に解決することは困難でしょうが、本展が本学所蔵の優れた美術資産を将来に向けて保存活用する方途を検討する一助になれば幸いです。

最後になりましたが、貴重な作品を快くお貸しくださった北大各部局の皆さま、また各部局と細部にわたる連絡調整の労を執っていただいた文学研究科・文学部会計系の職員の皆様のご協力がなければ、この展覧会は実現しませんでした。関係各位に深く感謝申し上げます。

2014年10月

北海道大学大学院文学研究科芸術学講座・教授

北村 清彦

美術の北大展

目次

004	ごあいさつ
006	総論 北海道大学所蔵美術作品 悉皆調査について 北村清彦
009	論稿1 画家・近藤七郎の生涯 野田佳奈子
012	論稿2 有島武郎の代表作 「やちだもの本立」について 八鍬利郎
014	論稿3 小川原脩の世界 柴勤
017	図版 第1章 描かれた北大 第2章 北大に生きた画家たち 第3章 北大に眠る絵画
060	展示作品リスト
062	「美術の北大」プロジェクトの歩み 室谷美里
065	調査報告作品リスト
076	美術の北大展年表
078	参考文献一覧

凡例

- 本図録は北海道大学総合博物館で開催する2014年度企画展「美術の北大展」の展覧会図録である。
- 本展覧会は、北海道大学大学院文学研究科芸術学研究室（以下、芸術学研究室）が行っている北海道大学所蔵美術作品悉皆調査の関連事業である。
- 作品番号は展覧会場での陳列番号と一致するが、作品展示の順序とは必ずしも一致しない。また、都合により本図録に掲載されている作品でも展示されていない場合がある。
- 各作品の図版については、作品リスト番号、作者名、タイトル、制作年、サイズ、所蔵／所在の順に記した。
- 作品の制作年は、作者による署名に基づいている。また、制作年の判断がつかない場合は、芸術学研究室で調査し推定年を記した。
- 作者名のローマ字表記は、作者のサインに関わらずヘボン式に統一した。
- 作品のタイトルは、原則として作品自体や銘板、固定資産台帳や文献に記載されたものを記した。タイトルがわからないものについては芸術学研究室で作成した。
- 作品の所在については、それを管理している部局を「所蔵」とし、実際に展示・収蔵されている場所を「所在」とし、併記した。
- 章扉の解説は、野田佳奈子が執筆した。
- 作品解説は、芸術学研究室の学生が執筆し、文末の括弧内に名前を記した。

◆著作権について

本展覧会を開催するにあたり、可能な限り著作権者に確認をとりましたが、もし本図録掲載に疑義がある場合は、芸術学研究室までご連絡ください。
また本図録の内容の一部あるいは全部を、転載、複写、および磁気または光記録媒体等への入力を禁じます。

北海道大学所蔵美術作品悉皆調査について

北海道大学大学院文学研究科芸術学講座 北村清彦

文学研究科芸術学研究室では、2011年度より北海道大学が所蔵している美術作品の悉皆調査、すなわちすべての作品の現状を一点ずつ確認する作業を実施している。そのきっかけは、2008年4月に文学研究科棟の耐震工事が終了してようやく自分の研究室に戻ってきた時、以前2階の印刷室前に掛けられていた清田操の作品が無くなっていたことに気づいたことである。清田の作品は無事、文学部に保存されていることが確認できたが、同様の事態は他部局でも起こっていることは容易に想像された。またこの工事期間中、医学部の旧看護婦宿舎に仮住まいしていたのだが、それまで足を踏み入れたことのない病院の通路などに沢山の絵が飾られていることにも気がついた。この歴史のある、また広大な敷地を持つ北大にどれほどの美術作品があるのかを知りたくなった。だが北大の美術の全貌を調査するとなると、時間も労力も必要なことは明らかだったし、なかなか本格的に着手するには至らなかった。その頃、北大美術部黒百合会でも活躍していた野田佳奈子さん（現・北海道立帯広美術館学芸員）が芸術学研究室の所属となって、今後の研究内容を相談していた際に、北大の美術の調査をやってみないかと持ちかけたところ、是非やらせてくださいという即答が返ってきた。それは2011年9月28日のことで、その時既に2014年10月に展覧会を実施することまで決まっていた。

その調査のための基礎資料は、2004年の大学法人化に伴い、国から北大に資産が移管される際に作成された固定資産台帳を元に、文学研究科会計係を通じて本部事務局に依頼し、「絵画」「彫刻」「書」などをキーワードとして抽出してもらったデータである。（以下「資産台帳」という）。その数はおおよそ300点余にのぼるが、現在までのところその約半数について現認調査することができた。

しかしこの資産台帳については、すぐに以下のような問題点が浮かび上がる。すなわち、資産台帳にはその所蔵先の記載はあるが、その所在先は記載

されていない。つまり例えば工学部が所蔵していても、それが工学部のどの場所にあるのかまでは分からない。年とともに管理責任者も交代してしまうので、所在を確認するために各部局の担当者には大変な苦勞を掛けた。本図録の記載で「所蔵／所在」と項目を分けたのも、所在先を明らかにするためである。また台帳の原本に「絵画」というキーワードが記載されていれば抽出されるが、台帳記載の語が「油絵」や「額」の場合にはそのデータが検出されないおそれがある。またキーワードとして「写真」、「工芸」、あるいは「標本」など何を用いるかによって検索結果が異なるが、どこまでを芸術の範疇に入れるのかといった美学的な問題をはらんでいる。実際、植物園には25,000点にも及ぶアイヌ民族などの工芸品が、また北方資料室には田本研造を初めとする5,000点にも及ぶ写真史的にも非常に重要な明治大正期の写真が保存されており、それらを芸術の対象とすることは十分に可能である。ただし、こうしたものも含め、それが絵画や工芸品や写真であるとしても、芸術作品として優れているかどうかについては、また別の美的・芸術的価値判断が必要となってくる。加えて、例えば卒業生が部屋に残してあったり、私物として研究室に飾られたりして、そもそも資産台帳に登録されていない作品があるかも知れない。その可能性を考えて北大の全部局に対してアンケート調査を行った結果、回答のあった限りで200点ほどの作品が新たに存在することが判明した。今回の展覧会をきっかけに、さらにそのような情報が集まってくることを期待している。

さて本展は絵画に限定した展覧会であるが、その中には林竹治郎や木田金次郎、小川原脩など中央画壇や北海道美術史にとって重要な作家もいるが、しかし大半はほとんどその名さえ知られていない画家たちの作品である。それらの作品がどのような経緯で北大の所蔵となったのか、それを知る関係者は今となってはほとんどいない。資料としては

『北大百年史』を初めとする北大各部局で作成した文書、特にかつて『北大時報』に連載されていた「シリーズ学内の美術」(1985年8月377号～1987年9月402号)の記述は貴重な情報源であった。それ以外にも北大黒百合会の記念誌、北海道の公募展の記録、雑誌や新聞記事、郷土誌や古地図など、あるいは北海道美術史に関する著作物など、可能な限り渉猟してはいるが、作者について、また作品の来歴や美術史的評価などについて、その詳細を明らかにすることは極めて困難である。

それでもモノとしての作品が目の前にあることがわれわれの調査研究にとって何よりも重要である。支持体の種類、配色や筆触、構図の作り方の特徴、描かれた人物や景物、キャンパスの損傷や絵の具の退色状態、サインや年号の有無、裏書きや箱書き、額装の際に挟まれた紙片の類まで、ありとあらゆる痕跡を手がかりに、作品が自ずと語り出す言葉を聴き取り、そしてそれと照応する、あるいは矛盾する資料を探し出すこと、さらに人(作者、所有者、寄贈者など)と時間(制作年、収蔵年、描かれた人物や景物の実年など)と空間(描かれた場所、展示されている部屋、保管場所やその状態など)の諸要素間にさまざまな関係性を構築すること。そうした作業に基づいて、あるひとつの可能的言説を作り出すことが作品の解釈である。

例をあげよう。野田さんの研究成果のひとつは近藤七郎という画家の発見である(作品リスト014, 015, 016)。その紹介は彼女に譲るとして、農学部卒の卒業生がひとりの画家としてパリに学んでいた頃、北大理学部創設のための教授会が時と所を同じくして開催された(p. 055「コラム③ パリ会議1929」)。当時、多くの日本人画家がパリに滞在している中で、田所哲太郎教授と近藤七郎とを結びつけたのは決して偶然ではないだろう。二人は田所が3才年上だが、農学部の卒業年度は同じで、当然在学中に面識があったはずである。それゆえ二人の関係がなければ、現在「パリシリーズ」と呼んでいる理

学部所蔵の絵画もありえなかったに違いない。

あるいは、小野垣哲之助の《北大風景》という6号(37.5cm×46.0cm)の小品を観察してみよう(作品リスト007)。長く工学部の事務長室に飾られていたが、丁寧な額装で、汚れも傷みもほとんど見られない。右下に「Tetu」とサインがあるが制作年の表記はない。描かれた風景は、初夏を思わせる爽やかな緑の中に佇む工学部初代部長の吉町太郎先生の銅像と今はない旧工学部の通称「白聖館」と呼ばれた校舎である。実はこの風景からズームインして吉町先生の銅像をアップにして描いた、大きさも額装も同じであるが、サインのない作品が工学研究院長室に飾られており、この2枚は一組で、ほぼ同時期に描かれたものと考えられる。吉町先生の銅像が設置されたのは1960年5月、制作したのは橋梁学が専門だった吉町先生の代表的な設計である旭橋のある旭川出身の彫刻家、加藤顕清であり、このときまだ吉町先生は存命だったので、おそらく加藤は吉町先生を実際に見た上で像を造ったのではないか。(ちなみに加藤は戦時中に撤去されたロータリーにあるクラーク像を復元鑄造し、また本部前庭の佐藤昌介先生の銅像も制作している。)また背景の白聖館の建物は当時すでに建て替えの議論が始まっていた。とすれば、この作品には制作年の表書きはないが、吉町先生像と白聖館の両方が描かれる時期は自ずと限られてくる。可能性としては、吉町先生の像設置にあわせて描かれたか、工学部創設40周年に当たる1964年を期してか、それとも72年に白聖館がすべて解体撤去されることを惜しんでの頃か、だろうか。そのような仮説を立てた上で、果たして額装を解いてキャンパスを取り出してみると、その裏面には「北大風景1967年」の記述が見つかった。すなわち、像の角度からして、すでに白聖館の中央玄関部分はなく、わずかに残っていた北側の翼廊部分を背景に、その解体を惜しみつつ吉町先生の像とともに描いたものだということがわかる。

ただなぜ小野垣なのか。小野垣が描いた作品を工学部が購入したのかもしれない、あるいは工学部の関係者が小野垣に制作を依頼したのかもしれないが、残念ながらその辺の事情はまだ判明していない。小野垣は岩内出身の画家で、本展にも出品されている木田金次郎(作品リスト033)に小学生の頃の絵の手ほどきを受けたことがあるという。その点では同じく木田に師事した坪谷六郎(作品リスト034)とは兄弟弟子の関係に当たる。彼が所属した全道美術協会(全道展)の目録に「小さい時、育った自然こそ血肉化し体質を作る。…僕自身を作ったであろう自然、僕の中にあるだろう自然こそが問題です。これは体質とか本性に近いものです」(「座談会 作家と創造の内面性」1972年)と述べている。木田とは色彩感覚も筆触もずいぶん違うが、二人の精神性がその深いところで結ばれていることを伺い知ることができるのである。

最後に今回の展覧会の意義を述べよう。まず本学所蔵の作品は美術館のそれのように特定の方針に沿ってコレクションされたものではないが、一世紀半に及ぶ本学の歴史の中で、自ずと集まってきた作品にはそれぞれの物語がある。その物語を丁寧に聴き出すことが、逆に本学の歴史をより詳らかにし、ひいては北海道における美術活動の歴史や特質に本学がいかに関与してきたかを改めて認識させることになるのである。

そしてその調査の過程で、いくつかの問題点が明らかになった。すなわち資産台帳は法人化に伴って作成され、その後も随時更新されているはずだが、冒頭にも述べたとおり、近年の建物の改修や増築に伴って、当初展示されていた場所から移動され、その所在が曖昧になった作品があること。倉庫や備品庫などに押し込められ、望ましい保存状態には置かれていない作品があること。展示されている場所が日光や照明、温湿度などの点で必ずしも作品保護にとって好ましくはないこと。さらに常時展示されていないながら、総長室や会議室などに

あってあまり一般的には人の目に触れる機会がないこと、などである。本学には美術作品を常設的に展示し収蔵するための専門施設がない以上、これら諸問題を一举に解決することは困難であるが、本学が所蔵している美術作品を将来に向けてのどのように保存活用することができるのか、本展はその方法について検討する機会を提供できたのではないかと思う。

またこの展覧会が、その企画の段階から実現に至るまで、その中心的役割を芸術学研究室に所属する院生・学生によって担われたということを強調しておかなければならない。特に野田さんがこの春から学芸員として職を得てからは、彼女の同級生である坂本真惟さん、室谷美里さん、大野藍子さん、高橋佳苗さんが中心となってこの展覧会の企画を進めてくれた。すなわち、企画書の作成、作品のリストやその展示プランの作成、図録の編集、解説記事の執筆、ポスターやチラシ、ホームページの作成などを通じた広報活動、デザイナーやカメラマンとの打ち合わせ、もちろん実際の展示作業やギャラリートークに至るまで、院生・学生たちは自ら考え、判断し、行動した。むろん教員もそのすべてに関わっているので、本展の全責任は教員にあるが、もしいくらかでも今回の展覧会が評価されることがあるとすれば、その功績はすべて院生・学生のものである。大学の資産を発掘調査研究し、それをひとつの展覧会という形で実現できたことは、北大にとって、北海道の美術史研究にとって意義深いだけでなく、院生・学生にとってこの上ない教育機会となったはずである。

画家・近藤七郎の生涯

北海道立帯広美術館 野田 佳奈子

1. はじめに

近藤七郎(1888-1936)は、札幌農学校出身で画家になったという珍しい経歴を持つ人物である。北大関係者で画家と言えば、北海道美術史の礎を築いた今田敬一を思い出す方もいるかも知れないが、今田と違い、近藤に関してはその人生や画業がこれまで明らかにされてはこなかった。

近藤を調査するきっかけは、『黒百合會回顧録』(北海道帝國大學文武會美術部、1931)に掲載されていた文章であった。「黒百合會出身の畫家として中央にある者は近藤七郎、山田正、市原達夫の諸君であります…(能勢眞美「黒百合會のことども」、『黒百合會回顧録』1931、p. 89)という文章の他、その名前は同回顧録に数回登場する。しかし、近藤についてのまとまった資料はほとんどなく、唯一詳細が語られていた資料は、大学文書館に所蔵されている『札幌同窓會第五十八回報告』(1936)に掲載されていた、早川直瀬「故近藤七郎君小傳」のみであった。この4ページほどの資料に掲載されていた情報を基に、同窓会誌、黒百合會関連の冊子、その他書籍から情報を集め、生涯や画業の一部を明らかにするに至った。こうした文献による調査と合わせて、作品の所在調査も行なった。その中で、北大の固定資産台帳からは、農学部「『絵画「風景画」(北大ポプラ並木)近藤作』、『絵画「風景画」(街なみ) 近藤作』という作品があるとの情報が得られた。2012年3月、農学部にご協力いただき、実際に作品を確認したところ、サインから近藤七郎の作品であることが判明した。

ここでは、これらの調査によって判明した、近藤七郎の画家としての活動を紹介したい。(略歴についてはp. 028の作家紹介を参照のこと。)なお、以下の記述は、前述の早川氏の「故近藤七郎君小傳」を基に、さらなる情報を加えたものである。

2. 画家としての活動と生涯

2-1. 画家としてのスタート

近藤が画家として歩み始めたのは、1919年のことである。大学在学中から、黒百合會などを通じて絵には親しんできたが、大学卒業後は台湾拓殖株式会社に入社し、その後は岳父である近藤利兵衛が取締役を務める豊國銀行に勤務していた。だが、30歳を過ぎた1919年(大正8)、洋画界に入るために豊國銀行を辞職し、画家として歩み始めることになる^{※1}。

1920年(大正9)、近藤は妻子を伴い京都に転居し、そこで6年ほど過ごしている。この頃の活動として注目したいのは、1926年(大正15)に長野で開催された個展「洋画家近藤七郎氏個人展覧会」である。これは、南信新聞社が主催し、長野の飯田・百十七ビルディングにて開かれた展覧会で、吾洞会の幹部である山田明美という人物が、主だって企画運営をしていた。南信新聞の記事では、二科展に入選していることや、関西の諸画会に関係を有しているということ、独学で絵を描いており、作風は「どちらかと謂へば穩健なる後期印象派に属して居る」(『南信新聞』、大正15年4月29日3面)ということが紹介されていた。

本展覧会出品作である《北大ポプラ並木》(作品リスト015)には、モチーフの描写や筆致などに拙さがみられる。独学で絵を描いていたという南信新聞の記事と合わせて考えて、《北大ポプラ並木》はこの頃の作品であると推測される。

2-2. フランス遊学

1927年(昭和2)、近藤は一家でフランスに渡り、クラマルに居を構える。フランスではアンドレ・ロート(1885-1962)やロジェ・ビッシュュール(1888-1964)のもとで絵を学んでいた。近藤は1922年から二科展に入選していたが、ロートとビッ

シェールは二科会のフランス在住会員であり、絵を学んだのはその繋がりだったと考えられる。ロートもビッシェールもキュビズムに参加したフランスの画家であるが、ロートは美術批評家や教育者として活躍したことで知られている人物である。

ここで、当時の日本人画家の渡仏の状況について触れておきたい。当時は、近藤と同じように、絵を描くためにパリへ渡っていた日本人画家が多数存在した。和田博文氏によると、本職が「画家、彫刻家、音楽家、写真師」である日本人の数は、1927年が177人、1928年が179人、1929年が164人、1930年は167人、1931年は209人であったという（『『巴里週報』とパリ在住日本人の動向』、石黒・田中・和田『ライブラリー・日本人のフランス体験 第2巻』2009、pp. 467-468）。この時代、これほどまでにフランスへ渡った日本人画家が多いことについて、富田章氏が述べている理由をまとめると、まずパリが当時の美術の中心地であったこと、次に日本の美術界が圧倒的にフランス美術から影響を受けていたこと、そして不況ではあったが、第一次大戦を契機に日本が確実に豊かになっていたこと、この3つが理由として考えられるという（『パリの日本人画家たちのベル・エポック―仏蘭西日本美術家協会の時代』、徳島県立近代美術館ほか『薩摩治郎八と巴里の日本人画家たち』1998、p. 18）。こうした状況が近藤七郎のフランス遊学を後押ししたことは想像に難くない。

フランス時代における近藤の絵画活動のうち、現在判明しているものは、1928年の日本美術大展覧会、1929年の第2回巴里日本美術協会展、1928年開催のサロン・ドートンヌ第21回展とその翌年の第22回展、1930年開催の第41回サロン・デ・ザンデパンダンへの出品である。

この時期に制作された作品の特徴は、彫塑的な人体表現と、量感あるモチーフの描写である。これらの特徴は、本展覧会出品作である《婦人像》（作品リスト014）や《街なみ》（作品リスト016）でも確認

できる。《婦人像》では、手や脚の表現に注目したい。手は、3つほどの階調で明暗が表現され、脚は縦長の4つの面に分かれているような塗り方がされている。どちらも粗く掘り出した彫刻のような表現であり、しなやかさやなめらかさはあまりみられない。《街なみ》では、画面中央に大きく描かれた建物に注目したい。題材や構図などからはユトリロの影響も感じられるが、《街なみ》にはユトリロの作品にみられるような、建築物を描写する際の鋭さがなく、代わりにどっしりとしたヴォリュームがみられる。

2-3. 帰国後の活動

フランスから帰国した1931年（昭和6）以降、近藤は東京に邸宅を構えて新たな生活を始めた。この年には、フランス滞在期の作品を集めた個展「滞佛作品展覧会」を銀座で早速開催し、絵画41点を出品している。また、青樹社画堂（東京・上野）での個展「近藤七郎ゴルフ画展」（1935年）や、日動画廊での個展を開いている。しかし日動画廊でのこの個展は、「兄が買っただけで、一般的には全然売れなかった（瀧梯三『日本の洋画界七十年―画家と画商の物語』2000、p. 55）ようであり、東京での活動には苦労も垣間見える。こうした東京での個展開催と並行して、二科会や太平洋画会などによる公募展への出品も継続しており、太平洋画会では会友にまで登りつめた。

帰国後の活動には、大学時代の繋がりを意識していた様子がみられる。それは、黒百合会展への出品や後輩へのデッサン指導、学生時代に暮らしていた青年寄宿舍の舎友会の設立提唱、その寄宿舍への絵の寄贈などの活動である。また、1933年（昭和8）には三越（札幌）にて個展が開催された。主催は黒百合会で、宮部名誉教授や小熊教授、サッポロビール工場長らが後援し、40点の作品が展示された。この時に《水浴の男等》という150号もの油彩画を北大に寄贈したようだが、現在その所在は不明である。この展覧会に関連して、近藤を囲

んだ洋画研究会も黒百合会によって開催され、参加者多数で賑わっていたようである。

このように、画家として活動を続けてきたが、1936年2月、冬に伊豆へゴルフ旅行に行った帰途に肺炎を患い、49歳で亡くなってしまう。

この年の5月、近藤の死を偲ぶための遺作展が自宅で開催された。自宅内のアトリエ、廊下、サロン、ホールの壁など至る所に遺作62点が展示された。家族をはじめ、有島生馬や、親友で画家の別府貫一郎らが一日かけて展示作業をしたとのことである。なお、有島生馬との交流がいつからはじまったのかは不明だが、黒百合会の関係で、有島武郎を通じて長く親交があったものと思われる※2。

帰国後に描いたとされる作品は、新聞等に掲載されていた図版を除いて未だ見つからない。図版を見る限りでは、フランス時代の作品に見られた粗い彫刻のような表現から脱し、より写実的な画風へと変化しているようにも思われる。今後、作品が見つかることを期待したい。

3. おわりに

近藤が画家として活動していたのは、1919年からの17年間であった。活動の場所を数回移す中で、画風にも変化が生じていることが、見つかった数枚の作品や図版からうかがえる。大学との関係に焦点を当てると、近藤にとって北大は、作品に描く対象であり、活動を行う場であり、自身の作品が残されている場でもあったと言えるだろう。

筆者が近藤七郎の調査に取り組みはじめたのは、本展覧会の基になった、北大所蔵美術作品調査を開始して2年目のことであった。今にして思えば、近藤の調査は、本展覧会を方向づけた一つの要因であったと言えるだろう。北大出身で画家になった人物がいたということは、北大関係者の描いた作品に焦点を当てるきっかけとなり、作者についてあまり知られぬまま所蔵されている作品がある

とわかったことで、既によく知られている画家の作品だけでなく、逸名の画家の作品にも注目する一つの契機となった。

近藤は生前こそ、それなりに名の知れた画家だったと思われるが、没後80年近くが経った現在、その名はすっかり忘れ去られている。これまで回顧されずにいた近藤七郎という一人の画家について改めて振り返ることで、美術と北大との在り方を考える一つの指標が得られたと言えるだろう。



近藤七郎
(出典：札幌同窓会編「札幌同窓会
第五十八回報告」、1937年。)

※1
早川直瀬「故近藤七郎君小傳」。なお、同年4月21日に義父の近藤利兵衛が旅先の大阪で急逝したことが、近藤七郎のこの転機に少なからず影響しているだろうと推測する。

※2
近藤が銀座で開いた「滯佛作品展覧会」(1931年)の際、有島生馬が展覧会目録に文章を寄せており、渡仏以前から付き合いがあったと考えられる。

有島武郎の代表作「やちだもの木立」について

北海道大学名誉教授 八 鍬 利郎

北大美術部「黒百合会」の創立者である文豪有島武郎の代表作「やちだもの木立」は現在、北海道立近代美術館で大切に保管され、企画展などの折に一般市民も観賞できることは大変喜ばしいことと思います。

実は、この貴重な作品が近代美術館に収まるまでに、多くの方々の好意や努力、そして思いがけない偶然も関連していることが懐かしく思い出されるので、この機会にその経緯を記すことと致します。

昭和53年(1978)、黒百合会創立70周年記念展の準備を進めていたある日、展覧会係の学生から「創立者である有島武郎先生の作品を展示したいのでは非世話をしてほしい」と頼まれました。私も大賛成で早速心当たりの人々に尋ねてみましたが、代表作とされている「やちだもの木立」の行方が皆目分からないのです。学生が手分けをして札幌市資料館、北海道立近代美術館、ニセコの有島記念館、東京の日本近代文学館など心当たりを限なく探したのですが手掛りは得られませんでした。ほとんど諦めの境地になっていたところ、記念誌の取材でOB回りをしていた学生から「ひょっとすると宮部金吾先生宅に有るかも知れない」とのOBからの情報が入り、早速北六条西十三丁目にあった宮部記念館(旧宮部邸)に尋ねたところ、全く違う絵で、とうとう記念展に飾ろうという願いは達せられませんでした。

ところが、記念展開催中に思いもかけぬ朗報が私に伝えられたのです。「東京の宮部会長宅の応接室に〈やちだもの木立〉が掛けられていました」という「家の光」協会の佐々木氏からの電話でした。1週間ほど前、私の研究のことで歓談中に、家の光協会の会長、宮部一郎氏が宮部金吾先生の養子であること、佐々木氏がその一郎氏に大変お世話になっていることが話題となり、一縷の望みをかけて絵の件について尋ねて頂くようお願いしてあったのです。

私は早速北海道立近代美術館にその旨を連絡しました。というのは近代美術館では翌年8月に木田金次郎展を企画しており、木田金次郎を語るに欠くことのできない有島武郎の作品を参考展示すべく、同館でも「やちだもの木立」を探していることを聞き及んでいたからです。私からの電話は予想以上に喜ばれ、その後の美術館の行動は極めて速やかで積極的でした。早速学芸部員が上京して宮部一郎氏邸を訪れ、絵の確認と木田金次郎展への展示の同意を得たのです。

昭和54年春、私は近代美術館の好意により待望の「やちだもの木立」と対面することができました。専門家の手によってクリーニングされたF4号のその絵は、明るい色彩の点描による正到有島の代表作といえる印象派風の作品でした。木々の緑と花畑の紅色は今もみずみずしい感触を伝え、やちだもの木々の葉が風にそよいでいる音さえ聞こえてくるような、それは平和な北海道の風景画でした。

この作品は8月に開かれた特別企画、木田金次郎展に参考展示され、金次郎の作品とともに、多くの参観者に深い感銘を与えたことは言うまでもありません。また昭和56年(1981)6月に発行された「札幌の絵画」(さっぽろ文庫17巻)のグラビアにもカラー写真でこの絵が載せられました。

木田金次郎展終了後、「やちだもの木立」が再び東京に送り返されたことを聞いて、私は少なからず気がかりな年月を過しました。このように貴重な作品は個人の家庭に置くより美術館に保存して、一般の市民に公開しつつ大切に保管されることが望ましいと考えるからです。

平成2年(1990)10月3日、宮部一郎氏は101歳の天寿を全うして逝去されました。そして氏が所蔵されていた宮部金吾先生の遺品が札幌に移され、北大農学部植物学教室に保管されることになりました。私は早速リストを調べて頂き、「やちだもの木立」が間違いなく札幌に到着していることを確認

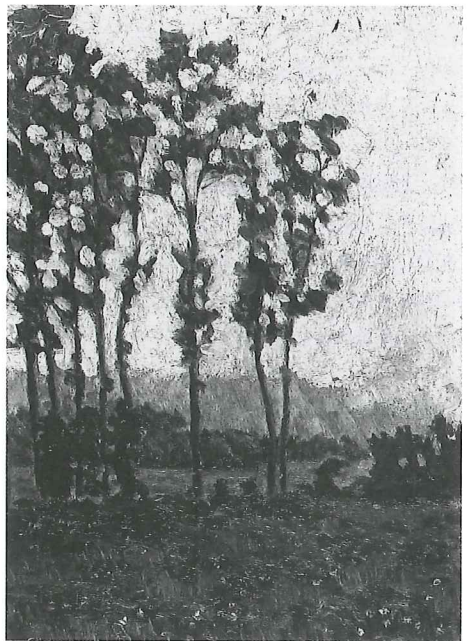
し得てほった次第です。この貴重な作品については美術館とも慎重に協議した結果、農学部所蔵（現在は「国立大学法人北海道大学大学院農学研究所蔵」）として北海道立近代美術館に寄託することになりました。また、その折複製された作品は、北大植物園の宮部記念館に飾られています。

因みに、「やちだもの木立」（写真）はF4号の油彩であり、絵の裏には宮部金吾先生の筆によって次のように記されています。

「有島武郎氏画 一九一四年

札幌市北十五条西五丁目辺ヨリやちだもの木立ヲ入レ、西方手稲山ヲ望ミシ景、
農場ヲ御花畑ニ変ヘ画カレシモノ、大正四年三月札幌ヲ去ラレル時寄贈サル」

札幌を去るに当たって、代表作の「やちだもの木立」を宮部金吾先生に寄贈されたことを思うとき、お二人の師弟の深い親交を感じずにはいられません。また、宮部先生が克明に記録をされたことにより、今になって、その絵の由来が正確に理解できるわけで、誠に感銘深いものがあります。



写真資料：

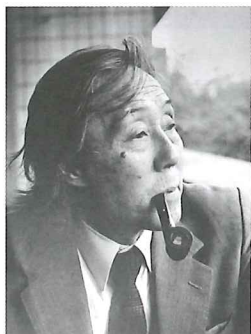
有島武郎《やちだもの木立》1914年 板に油彩
北海道大学蔵・北海道立近代美術館寄託

小川原脩の世界

小川原脩記念美術館館長 柴 勤

1. はじめに

小川原脩は北海道を代表する画家の一人である。1911(明治44)年、倶知安に生まれ、中学時代から油絵を描き始める。東京美術学校(現在の東京藝術大学)に学び、卒業後しばらくは東京にとどまり、当時の前衛美術の第一線で活動するも、41(昭和16)年、軍隊に招集されて旧満州に出征。44(昭和19)年には、陸軍省の報道部員として中国へ渡った。この時代の戦争記録画が、その後の画家の方向を決定づけることになる。戦争画の責任を問われ、かつての仲間、中央画壇とも分断され、疎開のために帰郷したはずの倶知安が唯一の制作拠点となる。しかし、制作意欲は衰えず、戦後間もなく全道展の創設に参加、個展も札幌や東京で定期的に開催し、75(昭和50)年の北海道文化賞をはじめとして文部大臣褒章、北海道新聞文化賞、北海道開発功労賞など名誉ある賞を受けている。作品の中では長い間にわたり動物たちをモチーフとしていたが、70歳を間近にして中国やチベット、インドなどアジアの大地と出会い、新たな境地に至る。そこから生まれる作品は見るものを安らかな世界へと誘う。2002年に91歳で死去。小川原脩美術館はその少し前の1999(平成11)年に開館し、画家が愛した羊蹄山の裾野で、絵筆に徹した一人の人間の芸術的な生きざまから生まれた味わい深い作品世界を繰り広げている。



2. 小川原脩の画業について

東京美術学校在学中から東光会、北海道美術協会展(道展)、帝展などに入選。当時はアカデミックな写実画を描いていたが、次第に疑問を抱くようになり、卒業後は、福沢一郎らに誘われて「エコール・ド・東京」、次いで「美術文化協会」とシュルレアリスムを基調とした前衛美術グループに参加した。その後、戦時下には戦争記録画を描き、従軍画家ともなるが、そのことが戦後の戦争画の責任問題、「美術文化協会」脱退につながる。その後は中央画壇に復帰することなく、倶知安を唯一の拠点とし、東京、札幌での個展、全道美術協会(全道展)など北海道での公募展を発表の場として活動を展開した。

60年以上にわたる作風の変遷を画家自身の言葉で辿ると次のようになる。1930年代の「レアリズムの時代」、30年代後半の「シュルレアリスムの時代」、40年代の「中世ヨーロッパの視線から14・15世紀へ」、終戦「再出発の時代」、50年代の「シュルレアリスムから造形性へ、あるいは迷走の時代」、50年代の終りから「土俗性・原始性を通して野生へ」、60年代は「『学生の叛乱』と呼ばれた時代」、70年代の「哲学は死んだと言われ始めた時代」、80年代「中国旅行と自然回帰、あるいは繁栄の時代」、同じく80年代「『チベット』への傾斜、あるいはアジアの再発見へ」、その後「西チベットの『ラダック』へ、あるいは繁栄に背を向けて」、同じくその後「インドへ、あるいはウッタルプラデッシュの大平原で」。

ここでは作風あるいは様式と時代を示す言葉が混在しており、タイトルからは作品が想像できないものもある。例えば終戦の「再出発の時代」は、デペイズマン(転位)やデフォルマシオン(変形)などシュルレアリスムの手法を用いた作品が描かれた時代であり、60年代の「学生の叛乱」とはパリで起きた学生運動「5月革命」と時代を共有し、画家自身を含め日本にも爆発的な影響を与えたアンフォ

ルメル(不定形)運動を指しているのだろう。初期の美術学校譲りのアカデミックな作品から世界の動きに連動したシュルレアリスムの時代、戦中の戦争記録画から発する中央画壇や仲間との分断、そして人間不信、戦後の数十年にわたる模索の時代、そして辿りついたアジアの大地。中国、チベット、インドで見た平穏な精神世界は、しかし、かつての日本、倶知安の姿であったかもしれないが。

3. 小川原脩と大学について

小川原脩は、1949(昭和24)年、38歳の時に北海道学芸大学(現在の北海道教育大学)の非常勤講師を務めたのをはじめ、同じく学芸大学の岩見沢分校、さらに藤女子大学でも非常勤講師を務めている。講師を務めた経緯、担当講座、正確な勤務期間など大学との関わりについては残念ながら小川原自身が触れることはほとんどなく、また現在のところそれらを裏付ける資料も見当たらない。ただ、後になって回顧した聞き語りをまとめた文章の中で次のような一節がみられる。

「道内の大学からも誘われましたが『ぼくは絵かきで教育者にはなれない』と美術教師にはとうとうなりませんでした。でも、教育大や北大などで時間講師として学生に教えました。北大が一番長く、五十六年まで十八年間も週一回倶知安から通いました。日ごろ、朝から晩までアトリエにこもっていますから、若い人たちに接するのは気分的にいいものでした。もっとも北大は工学部の建築工学科の学生たちに造形演習を指導するのが主で、気楽な気分です接したせいかもしれません。」

北大は18年間、1963(昭和38)年から81(昭和56)年まで、年齢でいうと52歳から70歳までと、いわば最も円熟した時期に講師を務めていた。その長い年月もあって、思い入れが強かったのだろう、別な個所でも触れている。

「北大で1週間に1回3時間 建築工学科の造形

演習の講義をもっている 前任者から頼まれたのでキッカケだが 給料も高くなく倶知安から往復4時間もかけて出かけてくるのは 自由なことと学生の中には面白いやつもいて・・・と もう10年以上も続いている」。



北大構内で学生と談笑する小川原脩

勤務した大学に関する発言は、これしか見当たらないが、アトリエに残された膨大な美術書等の間には、少なからずの講義ノートがあった。内容的には「西洋美術史」であり、造形演習を担当していた北大時代のものではない。それ以前の教育大か藤女子大学、あるいは両者のために用意したものであろう。現在、小川原脩記念美術館で保管されている資料は、B5判が15冊、A5判が2冊、A6判が1冊の計18冊。項目は旧石器時代の洞窟壁画から19世紀の世紀末美術にまで及ぶ。何れも、ペン書きの整った細かな文字でびっしりと書かれている。一項目について数種類の説明がある箇所もあるので、恐らく、複数の画集、美術辞典、美術史の参考書などを参考に、驚くべき労力、忍耐力、集中力などをもって写し取った、あるいはまとめ上げたのだろう。小川原脩は、若い、いやそれこそ少年時代から、権力的社会や迎合の人間、ことのほか無個性の作品に対して厳しい批判的な精神を持つ人であったが、自分に関わる責務に対しても決して手を緩めなかったことが、この講義ノートからもうかがえる気がする。

4. 北海道大学所蔵の作品について

4点もの小川原作品が北大構内にあるのは意外だったが、勤務していた18年間という長さを考えると不思議ではないか。作品が勤務先の工学部に納められているのは当然として、制作年の早い1点だけがクラーク会館にあるのは、どのような理由によるのだろうか。この1955(昭和30)年頃に描かれた作品《狩猟する男》は、その当時、小川原が人物の単身像、あるいはそこに鹿や小熊を組み合わせてフォルムの追求をしていたシリーズ作品に連なるもの。いわく「単純なフォルムに分解しながら、再構築に向かっていく」。ただ、こうした本人の造形的な関心とは別に、アイヌというモチーフ自体は、北海道においては社会的な関心へとつながり、耳目を集めることは明白である。たとえ、画家本人が「アンチ・モダニズムから再出発しようと、ことしから手にかけている連作の一つ。北海道の中に題材を取り、しかも素朴なもの、強いもの、重たいものをとねらってアイヌをとり上げてみた。作画の上では、神経質にならず、野太いものを表現しようとしたが、アイヌ紋様に強い興味をひかれたのも、この作品の動機の一つである」との思いで描いたのであっても、社会的な局面を避けて通ることはできない。この作品を北大が受け入れた(あるいは北大が求めた)背景はどのようなものであったのだろう。

《灯台と犬》に描かれる犬は、まさしく小川原が長年にわたって、とりわけ70年代には集中的に追求したモチーフである。人物を描くことから遠ざかり、犬や馬、オオハクチョウを執拗に登場させたのは、そこに人間社会の縮図を投影したのか、あるいは小川原自身の姿や歩み、想いを託したものなのか。画家は後に、その心境の一端を吐露している。「今考えると、戦後親しかった友人たちとも疎遠になり、『戦時中、君はよい想いをしたではないか。』と言われたり、美術雑誌を見ていたら、ある評論家が批判的な言葉で私の名前を出したり、そんな中

で、私は犬をはじめとする動物にばかり向かっているのですね。それらの人たちの戦後、時流に乗じた行動と戦前の行動との矛盾が目につくようになって、私の中に一種の人間不信みたいなものが出来たのは事実でしょう。」(『小川原脩画集』1994)。

《灯台と犬》は1970年の制作。その翌年、札幌で大規模な自選展が開催された。2会場に分かれて開催されたこの個展は、美術学校から前衛グループにいたる戦時中、東京画壇との決別、戦争画の責任追及、人間不信、中央への反逆、集団と個人の相反する論理など、それまでの40年にわたる変化と曲折に富む画業を初めて回顧するものであった。出品目録によると、その中に《灯台と犬》をタイトルに含む作品が3点出品されている。もしかすると北大の作品は、小川原の強い思いが込められたそのうちの1点かも知れない。



小川原脩《狩猟する男》1955年頃

第1章

描かれた北大

第1章では、北海道大学構内を描いた作品を紹介します。北海道大学所蔵美術作品悉皆調査では、北大各所を描いた作品を28点確認しましたが、そのうち24点は、緑豊かな季節の風景でした。例えば、田邊至は画面の半分以上に青々とした草木を描き、繁野三郎は木々の葉や牧草が太陽の光に照らされ鮮やかに輝いている様子をとらえました。北大関係者はもちろん、直接、北大と直接関係のない田邊や繁野などにとっても、北大の緑の風景は強く心惹きつけるものだったのでしょう。

このように緑豊かな風景がくり返し描かれるということは、ここがまさにひとつの理想的で誇らしい「学び舎」だったからです。それは昔も今も変わりませんが、とりわけ近年は、次々と新しい建物が建てられ、かつての面影を残すところも少なくなってきました。

画家たちが魅せられ、描いてきたものは何だったのでしょうか。本章の作品群は、単にノスタルジーにとどまることなく、あるべきキャンパス像の再考を迫るもののようにも思われるのです。



001 讀谷山朝典(?-1981)《牧場》1981年以前

キャンパス 油彩 126.0×159.0cm 大学本部事務局／同大会議室

《牧場》

牛たちが草を食む、牧場の長閑な景色が描かれる。前面の木々は高く伸び、上部はトリミングされて、その向こうには放牧地が広がりサイロや牛舎が見える。この牛舎は現在も第二農場にある牧牛舎と思われる。黄色の空を背景に、木々の青、屋根の赤色が織りなす、鮮やかな色彩のコントラストが印象的であり、北海道特有の透明な空気を感じさせる。画面の左下に「T. Yomiya ma」の署名がある。作者の讀谷山朝典は、沖縄に生まれ、東京美術学校で学んだ画家。光風会展、日展で入選している。(高野詩織)



002 田邊至 (1886-1968) 《札幌農科大学付属農場写生》1913年
板 油彩 23.5×32.5cm 大学文書館／同資料保管室

《札幌農科大学付属農場写生》

描かれているのは、1911年に現在の位置に移築されたモデル・バーンと思われる。画面の半分を占める草の緑と、雲ひとつない空の青が、同系色の落ち着いた調和を見せている。絵具を画面上で混ぜ合わせ、厚く塗り重ねる技法が用いられている。画面右下に「I. Tanabe 1913」の署名が記されている。本作は、田邊が、梁田貞氏(北大出身の作曲家)に贈ったもので、その甥の梁田政方氏によって本学に寄贈された。(高野詩織)

田邊 至 (1886-1968) TANABE Itaru

東京に生まれる。実兄に京都学派の哲学者田邊元を持つ。東京美術学校洋画科で黒田清輝に師事し、在学中第一回文部省展覧会に入選、卒業後は研究科で助手をつとめた。1914年、二科会の創立に関わるが、翌年にはこの会から離れ、文展・帝展への出品を続けた。その後、1928年には美術学校教授となり、1944年まで後進の指導にあたった。田邊の作品は初期の黒百合会展覧会でたびたび紹介され、北海道美術に影響を及ぼした。(高野詩織)

《北海道大学構内》

晩秋の夕暮れの北大構内、昆虫学教室付近が描かれる。作者の阿藤秀一郎は、岡山に生まれ、京都の関西美術院や東京の川端画学校で学び、その後フランスに留学。帰国後の30歳代後半は定住することなく、台湾や北海道、奈良など各地を遍歴し創作活動を行った。画壇から距離を置いていたためか阿藤の関連資料はほとんど見出すことができない。画面に「S. Atô 1935」のサイン、銘板には「昭和10年晩秋」とあり、47歳頃の作品と知られる。（泉谷宗達）



003 阿藤秀一郎（1888－1972）《北海道大学構内》1935年
キャンバス 油彩 24.0×33.0cm 大学本部事務局／総長室

《クラーク会館のために》

夏の理学部ローンの景色を描いた作品と思われる。画面手前には深い緑の葉をつけ大きな影を落とす木立、奥には赤みがかった建物、そして青い空が垣間見える。画面左下に「S. nakai 61」のサインがあり、画面裏には「クラーク会館のために 一九六一、八 額 竹内登久子 画 中居定雄作」と記載される。中居定雄は、岩内町生まれ、北海道生活派絵画の代表的作家として活躍した。（一戸彩花）



004 中居定雄（1905－1967）《クラーク会館のために》1961年
キャンバス 油彩 33.0×41.5cm 学務部／クラーク会館 和室A付属室

《北大農場》

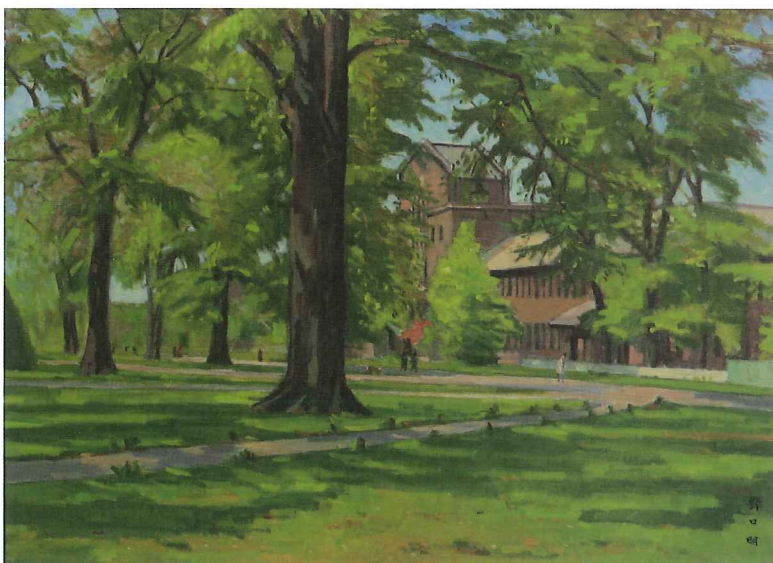
爽やかな初夏、雨上がりの第一農場が描き出される。牛たちは草を食み、木々は風にそよぐ。画面右の水たまりは茶色に鉛色を置いてさらに青色が塗られ、空は雲の白色に淡い青色を重ねるなど、みずみずしい印象ながら、色の重ね方に作者の工夫が認められる。画面左下に「三郎」のサイン、額裏に「文栄堂より寄贈」の記載がある。作者の繁野三郎は札幌に生まれた水彩画家。道内水彩画界を牽引し、札幌師範学校の卒業生として図画教育にも熱心に取り組んだことが知られる。（竹嶋康平）



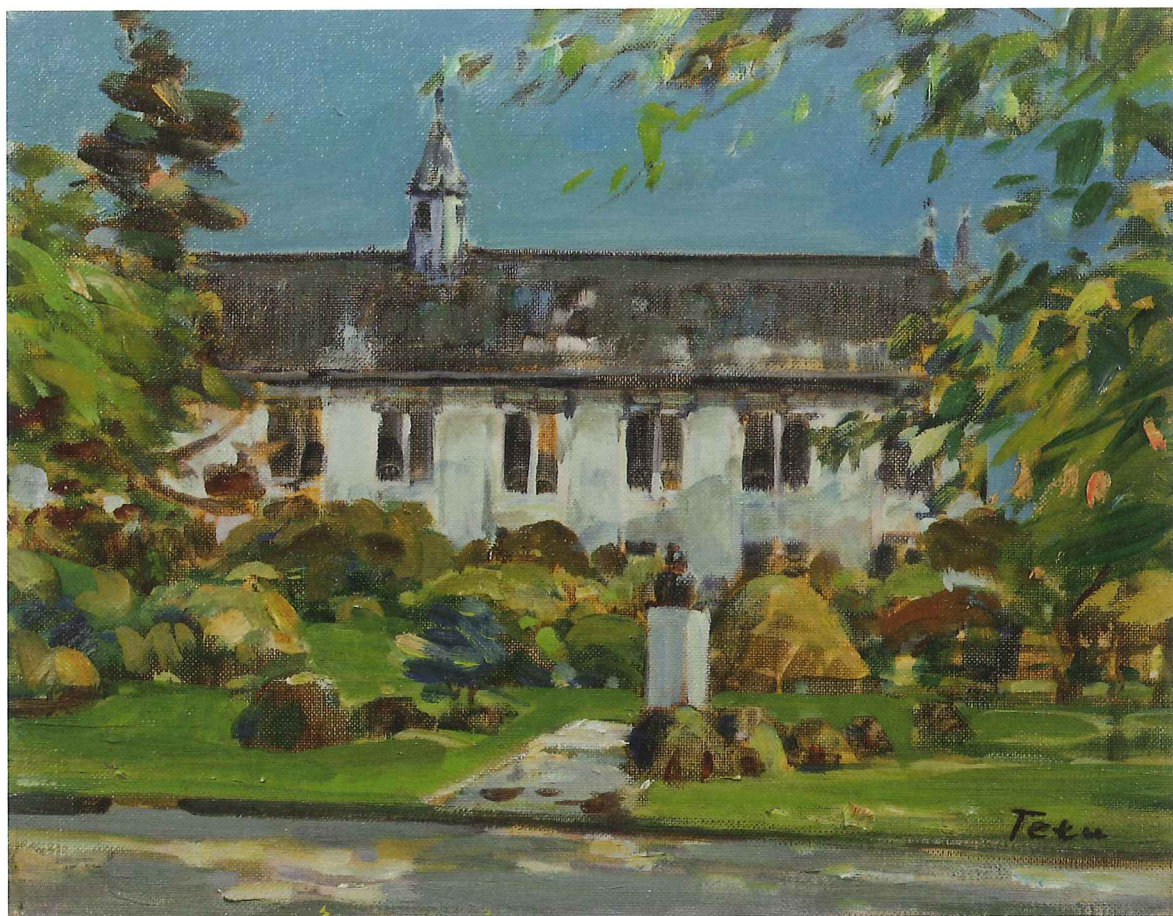
005 繁野三郎（1894－1986）《北大農場》1960年以前
紙 水彩 40.0×58.0cm 学務部／クラーク会館 財団事務室

《北海道大学（低温研究所）》

鮮やかな緑のエルムの森が画面手前から広がる。木立の向こうに、陽の光を浴びて佇んでいるのは低温科学研究所である（額裏には「北海道大学（低温研究所）」と記載される）。この建物は、1943年に理学部本館の向かいにスペイン風ゴシック様式で建造され、1969年に改築のため取り壊された。野口明は文部省や宮内省の勤務を経た教育者で、お茶の水女子大学の学長も務めた。そのかたわら大下藤次郎に師事して、水彩、油彩を得意とした画家でもあり、晩年『野口明画集』も刊行されている。（渡部万里鈴）



006 野口明（1895－1979）《北海道大学（低温研究所）》1966年
キャンバス 油彩 55.0×74.5cm 大学本部事務局／百年記念会館 ロビー



007 小野垣哲之助 (1922-2007) 《北大風景》1967年
キャンバス 油彩 37.5×46.0cm 工学部／同事務長室

《北大風景》

新緑の中、白壁館の名称で知られた旧工学部校舎が描かれる。二連窓や尖塔などにその独自の特徴を見てとることができる。画面中央に描かれる胸像は、橋梁学の吉町太郎一名誉教授(1873-1961)のものである。画面手前の道路や緑、建物の一部に使用された白色がきらめく初夏の陽光を思わせ、明るい雰囲気を生み出している。画面右側から入り込むように描かれた木の枝には薄紅色の絵の具がのせられて色調のアクセントとなっている。のびやかな筆運びによってすがすがしさが感じられる作品である。小野垣は小学生の頃より木田金次郎に絵画の指導を受けた。(佐々木蓉子)

小野垣哲之助 (1922-2007) ONOGAKI Tetsunosuke

岩内に生まれた小野垣は、小学生の頃から木田金次郎に絵の手ほどきを受け、高等小学校卒業後は木田との関わりの深い札幌の画材店・銀嶺荘に勤めた。その後、岩内に戻り再び木田に師事し、結婚後は札幌に移り、木田も創立会員であった全道美術協会(全道展)に入選し、1959年に会員となる。様々なモチーフを巧みに描く小野垣は、あえて木田の画風を避けてきたというが、木田から得た色彩感覚が制作の基礎になっているという。

(野田佳奈子)

《植物園》

夏の北海道大学植物園を描いた作品。うっそうと生い茂る木々が池を囲む画面構成であり、緑を中心とした落ち着いた色調でまとめられた画面の中で、白い鳥が悠然と泳いでいる姿がひととき目を引く。3羽の鳥が池の奥に配されることで、広々とした奥行きも感じられる。本作に描かれた場所は、植物園の図面から、博物館本館の裏側付近と推定される。画面左下に「N. ITO」とサインがあるが、作者については今のところ不詳。星野勇三農学部名誉教授旧蔵品。(上符一也)



008 N. ITO (サイン表記) 《植物園》 制作年不詳

キャンバス 油彩 41.0×53.0cm 大学文書館／同資料保管室

《第一農場》

雲や草木に日の光が差し込む農場の風景である。画面右では一本の大木が葉を大きく広げて雄々しくそびえて、画面左奥にはポプラが立ち並んでいる。雲の白と草木の緑による明るい色調の中に、日の光の橙色が溶け込み、優しく落ち着いた印象を与える。画面右下には「S. IGARASHI 1910」と読めるサインがあり、画面裏には「贈呈 星野博士／大正四年十二月五日 札幌荘内館」と記される。大正4年は1915年、荘内館は学生寮荘内寮の前身であり、作品リスト008同様星野名誉教授に所縁の作品である。(町田義敦)



009 S. IGARASHI (サイン表記) 《第一農場》 1910年

キャンバス 油彩 69.5×80.0cm 大学文書館／同資料保管室



《クラーク先生像》

ウィリアム・S.クラーク博士(1826 - 1886)の功績を称えて、北海道大学創基80周年の記念に設立されたクラーク会館の開館式(1960)にあわせて、博士が学長を務めた米国・マサチューセッツ大学から贈られた肖像画である。本作の額縁は、同大学クラーク博士の研究室の窓枠から作られている。多くの写真に残されている威厳に満ちたクラーク博士とは違い、穏やかな表情で遠くを見つめる姿で描かれているのが注目される。本作は北大とマサチューセッツ大学の深い交流の証といえることができるだろう。(坂本真惟)

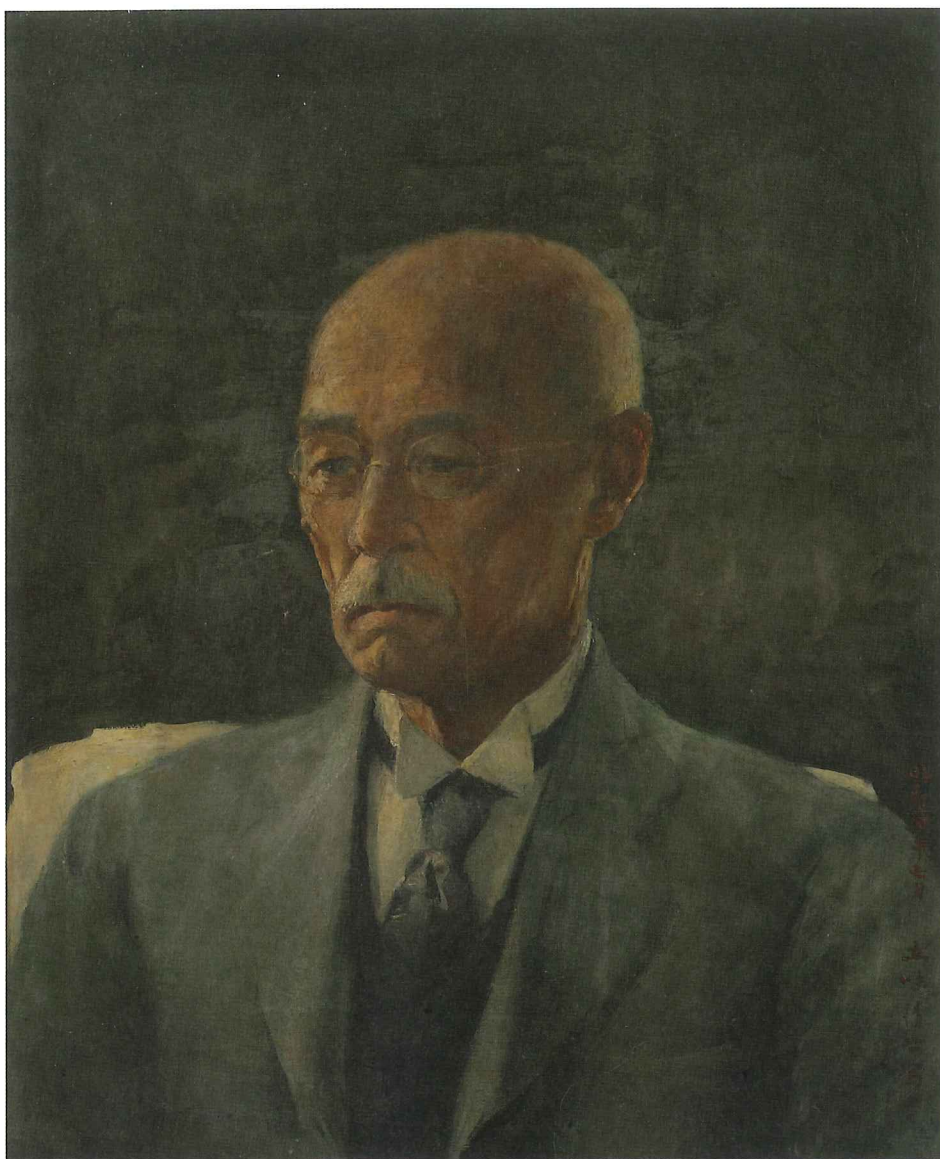
010 エレノア・M. ジョンソン (生没年不詳) 《クラーク先生像》 1960年以前
キャンバス 油彩 59.0×50.0cm 大学本部事務局／総長室

コラム① 肖像画 一系譜と理念

北大所蔵の肖像画は、今回の調査では27点確認することができた。クラーク会館に1点、大学文書館資料保管室に10点、百年記念会館大会議室に15点、そして総長室に1点が保管される。そのほとんどは歴代の総長(校長、学長)がその像主である。なかでも百年記念会館大会議室には、初代から第15代までの総長の肖像画が壁一面に掛けられており、歴代総長が一堂に会するこの場所は、描かれた人物たちが中心となって創り上げられてきた北大の歴史、時間の積み重ねが示されているともいえるだろう。一方、総長室にはクラーク博士の肖像画が設置されるが、ここには総長室という場所とクラーク博士という人物の結びつきに北大精神のバックボーンが意識されるだろう。大学における肖像画は、現在にまで繋がる大学の系譜と同時に大学の理念の証人といえるだろう。(坂本真惟)



百年記念会館 大会議室



011 五味清吉 (1886-1954)

《佐藤昌介肖像画》1930年

キャンバス 油彩 73.0×61.0cm

大学文書館／同資料保管室

《佐藤昌介肖像画》

佐藤昌介(1856-1939)は、岩手出身で、札幌農学校を1880年に第一期生として卒業、農学校出身者として初めて母校の教授に迎えられ、札幌農学校長、東北帝国大学農科大学長、北海道帝国大学総長を歴任した。作者の五味清吉は、佐藤と同じ岩手出身の洋画家で、岡田三郎助から西洋画を学び、東京美術学校卒、文展、帝展で活躍、印象派風の画風で知られる。本作では、筆致を残した筆使いやハイライトを用いた陰影表現に絵の具の物質感をみせつつ写実的な表現を実現している。画面右下に「昭和庚午七月 五味清吉寫」(「昭和庚午」は昭和5年／1930年)の款記がある。(坂本真惟)



012 藤雅三 (1853-1916)
《黒田清隆肖像画》1885年
キャンバス 油彩 75.0×56.5cm
大学文書館／同資料保管室

《黒田清隆肖像画》

黒田清隆(1840-1900)は、開拓次官として北海道の開拓を進め、札幌農学校設立の構想を最初に示した。作者の藤雅三はフランスで活躍した洋画家で、黒田清輝(1866-1924)を美術の道へ引き入れた人物として知られるが、帰国せず米国で没したためその作品はほとんど残されていない。本作裏面には「明治十八年春三月 藤雅三謹寫」とあり、渡仏(1885)直前のものと知られる。平面的な印象を受けるが、これは画業の初期に日本画(南画)を学んでいたためかとも思われ、渡仏以前の画業を知る作例として貴重である。(坂本真惟)



013 黒田清輝 (1866-1924)
《橋口文蔵肖像画》1924年以前
キャンバス 油彩 66.9×51.7cm
大学文書館／同資料保管室

《橋口文蔵肖像画》

橋口文蔵(1853-1903)は、鹿児島生まれ、明治時代の官僚で、札幌農学校第3代校長。本作は橋口が亡くなった際、遺族の依頼によって黒田清輝が写真をもとに制作し札幌農学校に寄贈されたものである。黒田清輝は外光派と称された明治大正期の指導的な洋画家。本作は門弟たちが下絵を描き、黒田自身は仕上げを担当したと言われている。しかし画面全体に光が行きわたる柔らかな雰囲気からは、他の黒田作品とも共通する特色を見て取ることができる。(坂本真惟)

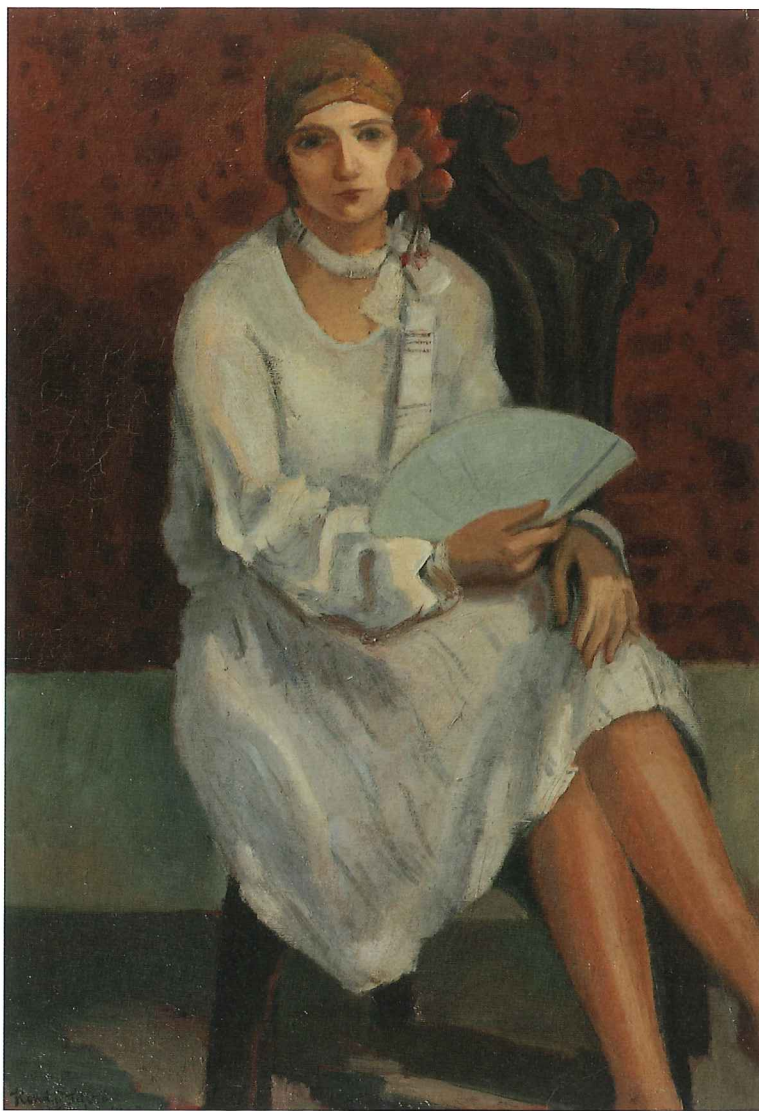
第2章

北大に生きた画家たち

第2章では、北大生や教職員など、北大関係者が描いた作品を紹介します。美術の実技を専門に学ぶ課程のない本学にも、熱心に絵画制作に取り組んできた者は決して少なくありません。とくに100年を超える伝統を持つ北大美術部黒百合会を中心に、彼らの活動の場は、時には学外へも広がってゆくものでした。

助教授として本学に就任したのち、油彩画に取り組み始めた池田芳郎。東京美術学校卒業後、本学で図画教師を勤める傍ら制作にも励んだ中根孝治。学生時代に瑞々しい感性で優れた風景画を描いた渡辺勲。病理皮膚標本である「ムラージュ」の制作者として知られ、戦後の道展会員として絵画制作も続けていた南条議雄。そして銀行員から転身し、画家となった近藤七郎。資料がほとんどない中で、その画業を辿ることは大変困難ですが、本展をきっかけに本学がこのようなすぐれた画家を輩出してきたことが明らかになりました。

今後も調査研究を継続し、「美術の北大」の名を一層高められればと思っています。



014 近藤七郎 (1888-1936) 《婦人像》 1928年
キャンバス 油彩 81.0×57.0cm 理学部／同本館 大会議室

《婦人像》

「Kondô Shichirô Paris 1928」のサインがあり、札幌農学校出身の画家、近藤七郎がフランス滞在期に描いた作品であることが知られる。手に扇を持った女性の踊り子が、ゆったりとした衣服を身にまとい、脚を組んで椅子に腰かけ、こちらを見つめている。当時師事していたキュビスムの画家、アンドレ・ロート (1885-1962) の影響が、たとえばスカートや袖の襞の直線的な描き方、縦方向に4つの面に分かれる脚の描写や彩色法に認められるだろう。理学部第一回教授会がパリで開かれた際、教授の田所哲太郎氏が購入し、現在も理学部大会議室に飾られている。(野田佳奈子)

近藤七郎 (1888-1936) KONDO Shichiro

福島県に生まれる。1906年に札幌農学校へ入学。北大美術部黒百合会に所属し、絵画制作に取り組んだ。卒業後は銀行などに勤めるものの、1919年に画家へ転向。独学で風景画などを描いた。1927年に渡仏し、アンドレ・ロートやロジェ・ビッシュエールに絵を学び、サロン・ドートンヌなどに出品。帰国してからは二科展などへの出品のみならず、銀座や札幌での個展も開催した。1936年に急性肺炎で死去。(野田佳奈子)

《北大ポプラ並木》

ポプラ並木と農場が、穏やかな淡い色彩で描かれている。青々としたポプラや畑に咲く花の様子から、初夏から盛夏の時期の風景と思われる。制作年は不詳ながら、細部を省略した筆致にはいまだ生硬さが見られることや、キャンバスよりも入手が容易なベニヤ板に描かれていることから、近藤の画業の初期の作例であると推測される。(野田佳奈子)



015 近藤七郎(1888-1936)《北大ポプラ並木》1936年以前
ベニヤ板 油彩 38.0×45.5cm 農学部／同資料保管庫

《街なみ》

ずっしりとした量感を感じさせる建物が大きく描かれている。建物に書かれている文字は「Couture(仕立て屋)」と読みとれ、フランス滞在期に描かれた作品と思われる。描かれた建物は、いずれも細部の描写や質感にこだわるのではなく、単純な形態として描かれている。通りを行き交う人々も、簡略化して描かれているが、服装や身体の向きは判別できる。青味がかった色の背景は、赤茶色の屋根やオレンジ色の2階の壁、臙脂色の1階の壁と対比されている。このような、色彩の対比や簡潔な描写によって全体がすっきりとまとめられている作品である。(野田佳奈子)



016 近藤七郎(1888-1936)《街なみ》1929-31年頃
キャンバス 油彩 58.7×90.5cm 農学部／同資料保管庫



017 南条議雄 (1940? - 1983) 《風景(オタモイ)》 1932 - 47年頃

キャンバス 油彩 31.5×40.7cm 大学病院／看護婦宿舎「えんれい草」ミーティングルーム

《風景(オタモイ)》

岩肌をむき出した崖が、画面の左から迫り出すように描かれ、船を浮かべる穏やかな青い海面は、画面の右から上方へ、青い空に続くように描かれている。崖の間にひっそりと顔をのぞかせる白い壁の建築は、オタモイ海岸(小樽市)に存在していた「竜宮閣」と思われる。「n. nanjo」のサインがあり、皮膚病変の蠟型標本であるムラージュ製作者の南条議雄の作品と知られる。絵の具の色をそのまま活かした鮮やかな色彩や、細部を簡略化した筆致には素朴な味わいを感じられる。(野田佳奈子)

南条議雄 (1940? - 1983) NANJO Norio

画家を志望していたが、周囲に反対され、少しでも絵にゆかりのある仕事と思い、病理学教室でスケッチを描く仕事に就いたという。1939年に、東京帝国大学皮膚科教室の伊藤有(1864 - 1934)のもとで、ムラージュ(皮膚病などの蠟製標本)の技術を学んでからは、精巧なムラージュを数多く残した。絵画制作においては、道展や日展系の洋画団体である創元会、また黒百合会展へも油彩作品を出品した。(野田佳奈子)



023 渡辺 勲 (1941-) 《碇泊》 1961年

キャンパス 油彩 64.0×80.0cm 学務部／高等教育推進機構 中会議室

《碇泊》

碇泊する二隻の船、背後には大きな入江と赤岩山が描かれる小樽港の景である。キャンパス上で重ね合わされた絵の具、モチーフを縁取る黒い線が特徴的であり、造形の確かさと、画家自身がいくどもこの風景をスケッチしたと語る思い入れの深さがうかがえる。画面右下には「5. 61 Isao Watanabe」のサインがあり、裏面には「画題『碇泊』昭和39年卒業 黒百合会員 渡辺勲」と記される。渡辺勲は、黒百合会に所属し、1964年に農学部を卒業、現在も版画家として活躍している。本作は卒業間際に開いた個展にも出品された。

(高野詩織)



018 池田芳郎（1895－1992）《北大工学部》1954年以前
キャンパス 油彩 72.0×93.0cm 工学部／同C211室

《北大工学部》

1923年に建てられ白壁館の名で親しまれた旧工学部校舎を描いた作品。緑濃い木々と、青々とした空の合間からのぞく建物の白さが印象的である。入口のある棟ははっきりと描きこまれているが、建物のそれ以外の部分はうすく描かれ、描き分けがされている。清風が通り抜ける北海道の爽やかな初夏の風情が漂う。「Y. IKEDA」のサインがあり、制作年は不詳ではあるが、画面裏の表記によると池田が1954年の退官記念に北工会同窓会に寄贈したことがわかる。（大野藍子）

池田芳郎（1895－1992）IKEDA Yoshio

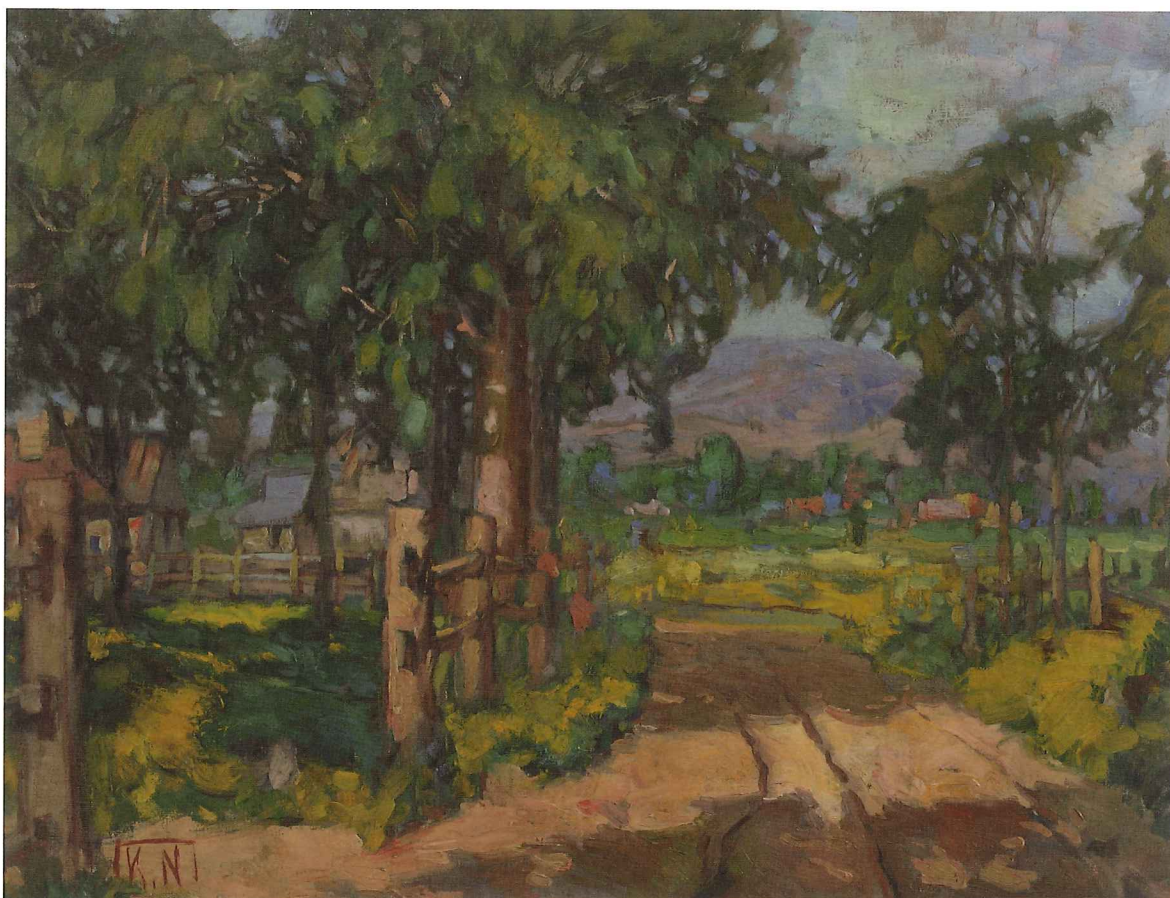
北海道生まれ、函館中学から一高を経て東京帝国大学理学部物理学科へ進む。1922年より欧米各国へ留学。帰国後、1924年に北海道帝国大学に助教授として赴任、1929年の理学部新設とともに教授に就任し、1954年まで在籍。滞欧の折に絵画に関心を抱き、北大時代に研究のかたわら油彩画制作に意欲的に取り組み、1933年以降は黒百合会展にほぼ毎年出品、晩年には個展を開催した。留学中に知り合った洋画家の青山義雄や、岩内の画家・木田金次郎をはじめとする多くの画家と交流を持った。（大野藍子）



019 池田芳郎（1895－1992）《校庭》1936年
キャンバス 油彩 60.5×90.5cm 大学文書館／同資料保管室

《校庭》

ゆるやかな川が枯れた草木の間を手前から右奥に向けて流れ、葉を落とした木々、雪の降り積もった山、そして鈍い灰色の北の空を映した川の水面が、北海道の晩秋を思わせる。荒涼とした雰囲気ではあるが、下地をしっかりと作った上に多彩な緑や黄の絵の具が使われており、自然の色彩が季節の変化の中で移りゆく様が表現されている。画面に「Y. IKEDA 1936」のサイン、裏に「校庭 黒百合会 池田芳郎」の貼紙がある。星野勇三農学部名誉教授旧蔵品。（大野藍子）



020 中根孝治 (1888-1975) 《第二農場》 1975年以前
キャンバス 油彩 60.0×80.0cm 大学文書館／同資料保管室

《第二農場》

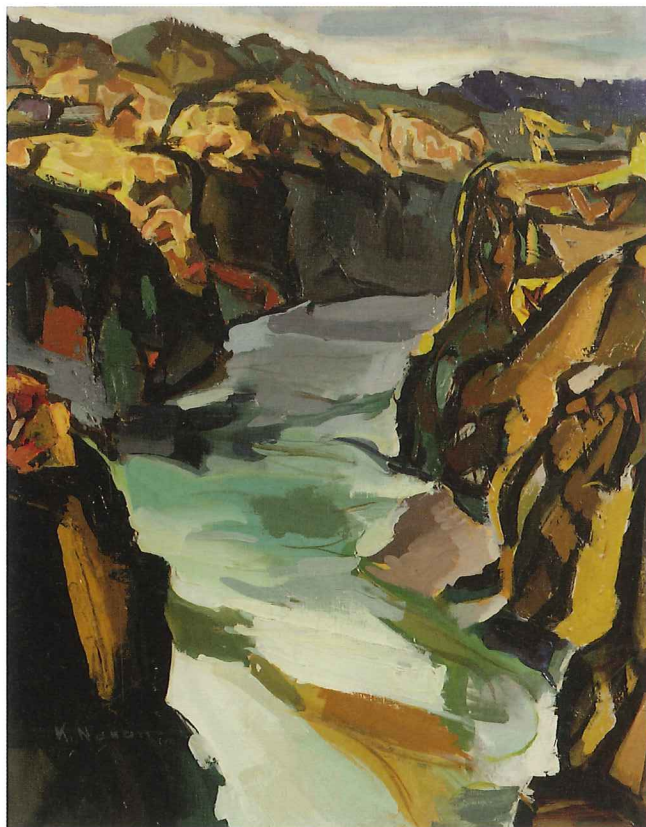
木々は緑の葉が生い茂り、地面にくっきりした影を落とす、晴れた日の第二農場を描いたと思われる。左に見える建物は、八鍬利郎《旧第二農場》(作品リスト024)にも登場するモデルバンの牛舎であろう。幅の広い道がゆったりと曲がりながら奥へ続いて、遠くの山や空に視線が誘導され、画面に広がりとお行きを作っている。緑と白みがかった茶を基調とする画面の中で、ところどころに配された青や黄がアクセントになっている。左下には四角で囲まれた「K. N」のサインがあり、裏に「北大黒百合會出品 中根孝治」の貼紙がある。星野勇三農学部名誉教授旧蔵品。(室谷美里)

中根孝治 (1888-1975) NAKANE Koji

山形県に生まれ、東京美術学校で日本画を学んだ。1922年から42年間の長きにわたり、北海道帝国大学予科および北海道大学農学部で図画の講義を担当した。「図学」や「用器画」の教科書を複数著し、1967年には、日本図学会の初代名誉会員に推挙された。1925年の北海道美術協会(道展)や、1928年の蒼玄会の設立にも参加しており、北海道美術史の黎明期を支えた人物の一人とも言える。北大美術部黒百合会でも学生への指導を行っていた。(室谷美里)

《溪谷》

岩山の間を勢いよく下る水の流れが目を引く作品である。太い輪郭線で縁取られた岩山や、一気に長く引かれた線で描かれた水流が、力強い印象を与える。画面左下には「K. Nakane」のサインがある。本作は写実的な表現とは言えないが、岩肌の表面や水流に見られる、何色も重ねた色使いと明暗表現によって、連なる岩山の遠近感や、迫り来る水の勢いがありと感じられる。(室谷美里)



021 中根孝治 (1888-1975)

《溪谷》1975年以前

キャンバス 油彩 91.0×73.0cm

理学部／同本館 大会議室

《金魚鉢のある静物》

金魚の泳ぐ鉢を中心にして、果物と花瓶、四角の瓶がテーブルの上に置かれている。画面の色調は青や緑の落ち着いた調子で統一されているが、その中で鉢の白色と金魚の赤色が目を引きその存在を浮かび上がらせている。俯瞰的にとらえられたバランスのよい構図や、輪郭線を曖昧にして色を重ねていく果物の描写には、セザンヌの静物画に通じるものが指摘できるだろう。右下に「K. Nakane」のサインがある。(室谷美里)



022 中根孝治 (1888-1975) 《金魚鉢のある静物》1975年以前

キャンバス 油彩 60.0×80.0cm 工学部／同C212室



024 八鍬利郎 (1928-) 《旧第二農場》1969年

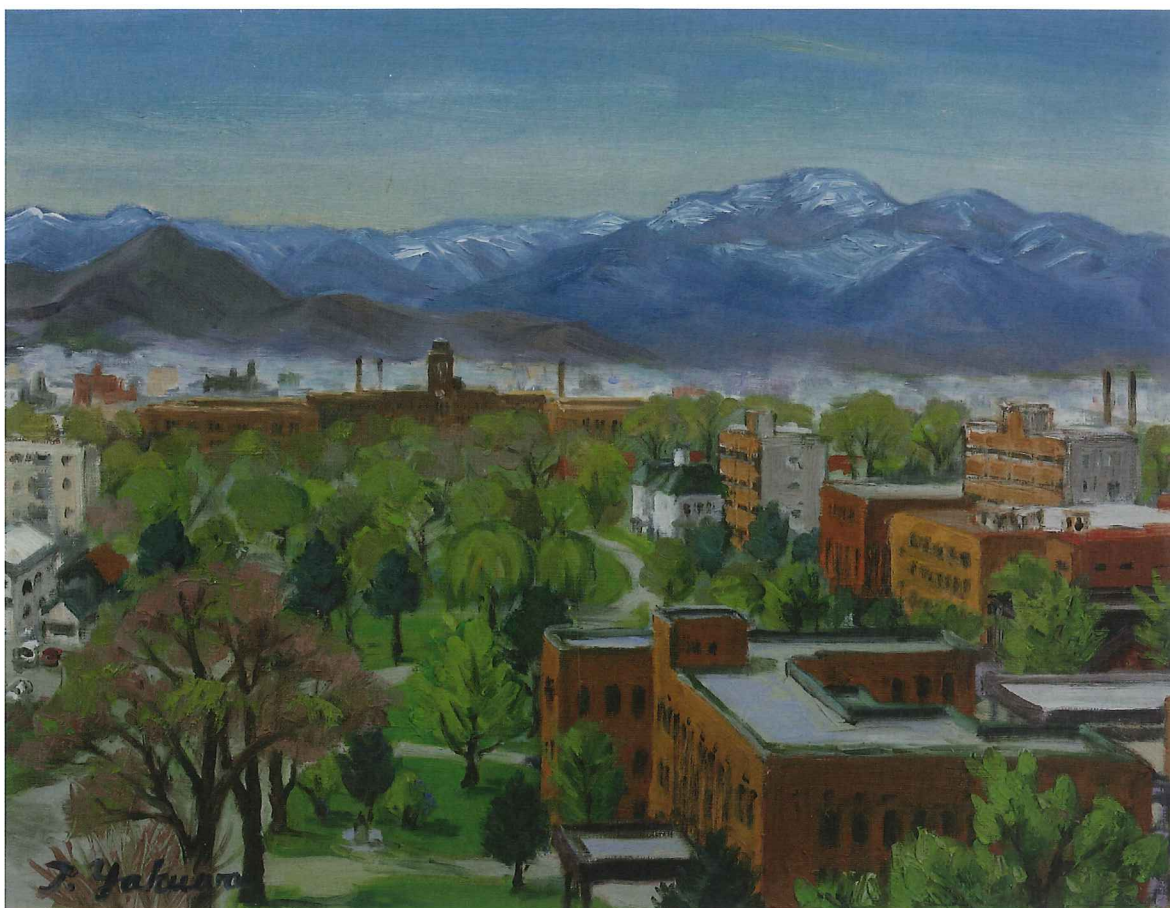
キャンパス 油彩 93.0×119.5cm 大学本部事務局／百年記念会館 ロビー

《旧第二農場》

晴れた日の第二農場を描いた作品。画面手前には構内を流れるサクシュコトニ川、空を覆うように枝を伸ばす木々が描かれ、その奥には牝牛舎が見える。これは1967年まで使用されていた牛舎で、その左右対称の美しい外観は数多くの作品に描かれている。屋根の色は、現在は赤であるが、本作では緑で塗られている。そのため画面全体が青味のある緑で統一され、落ち着いた印象を与える。画面左下には「T. Yakuwa」のサインがある。(高野詩織)

八鍬利郎 (1928-) YAKUWA Toshiro

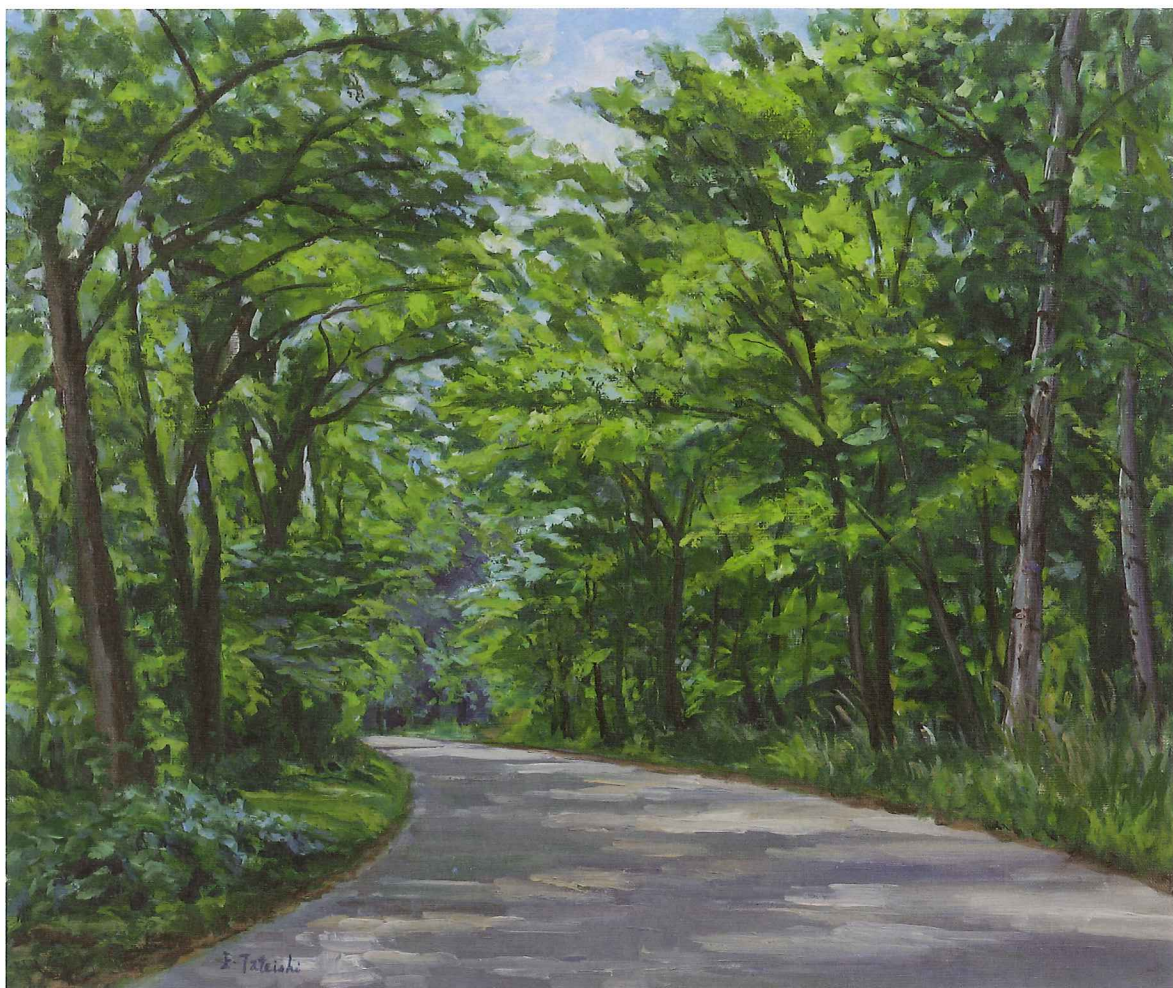
神戸市に生まれる。北海道大学農学部農学科に学び、卒業後は同大学農学部にて奉職し、1992年に定年退官するまでつとめた。現在は同大学名誉教授(農学博士)である。一方で、数多くの絵画を描き、新道展、白日会などで活動している。1971年より21年間、北大美術部黒百合会の顧問教官。『北大構内スケッチ』(1992年、北海道大学出版会)をはじめ、3冊の画集が出版されている。(高野詩織)



025 八鉞利郎（1928－）《北大構内展望》1988年
キャンパス 油彩 41.0×53.0cm 大学本部事務局／同事務局長室

《北大構内展望》

正門付近から北大キャンパスを俯瞰した作品である。画面右側には、本部事務局や付属図書館、白河講堂が並び、その先には農学部、そして遠景には円山や大倉山の連なりが見える。山頂に残っている雪や、構内の色づいた桜の木が、春の訪れを感じさせるだろう。各モチーフは太い筆でのびのびと描かれている。画面左下に、「T. Yakuwa」のサインがある。なお本作は八鉞の画集『北大構内スケッチ』の表紙にもなっている。（高野詩織）



026 美阪恵美子（1943－）《深緑の頃（北大構内）》1989年
キャンバス 油彩 60.5×73.1cm 大学病院／看護婦宿舎「えんれい草」ラウンジ

《深緑の頃（北大構内）》

描かれたのは北部食堂裏の恵迪寮へ通じる道、木々の間に雲がのぞく初夏の風景。木の葉の黄緑色が前面に迫り、空には美しい薄紫色が配される。道幅が画面下枠いっぱいになり、そこに落ちる影が北大キャンパスならではの緑の豊かさを伝える。作者は元北大病院職員、画面左下に「E. Tateishi」のサインがあり、裏面に「立石恵美子 89.8 平成1年8月」「美阪恵美子」の記載がある。本作は北大病院リハビリテーション部設立時(1998)から所蔵され現在は看護婦宿舎「えんれい草」に展示されている。（土田あゆみ）



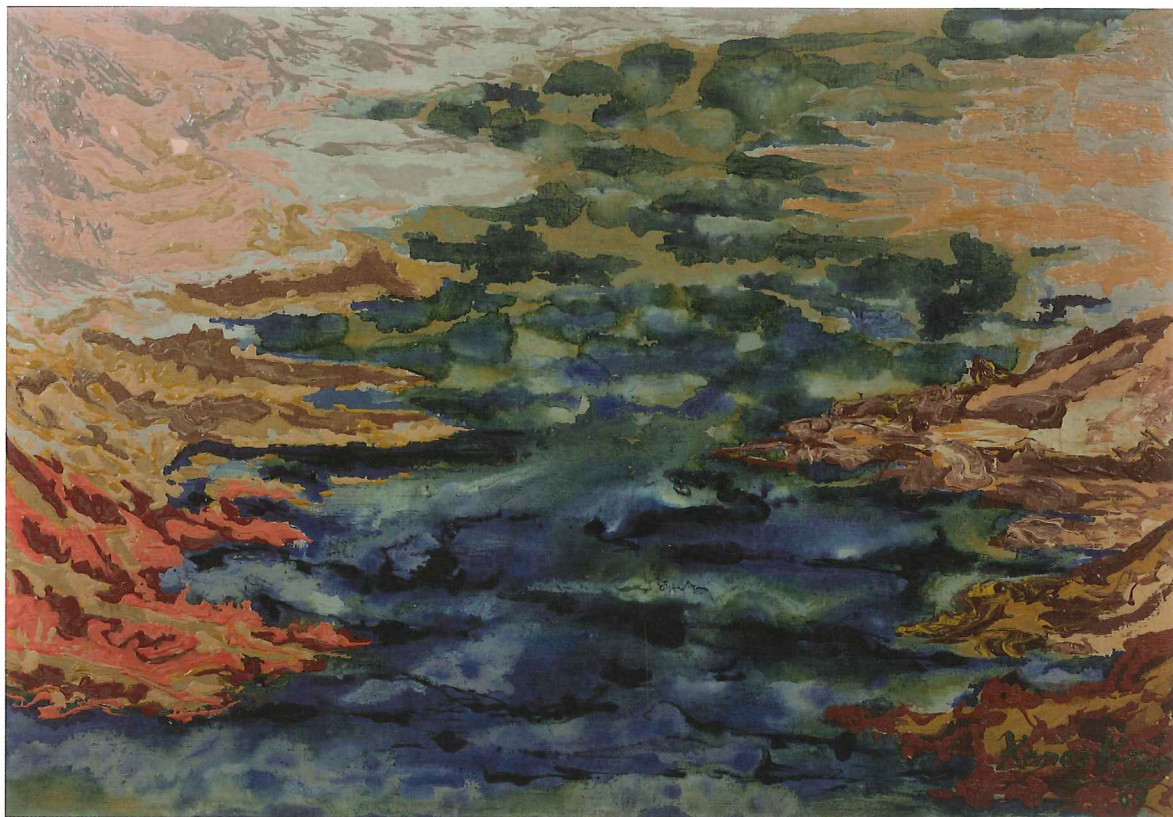
028 今田敬一（1896－1981）《卓上静物》1981年以前
キャンバス 油彩 100.0×80.0cm 農学部／同図書室

《卓上静物》

今田敬一は、農学部林学科教授で、北海道美術協会（道展）創立メンバーでもあり、北海道美術史の研究者としても著名。北大、北海道の絵画史を語るに欠かせない人物といえる。本作は、テーブル上に置かれた水差し、籠に入った果物、カップが描かれているが、とりわけ目を引くのはその色の配置であり、鮮やかな緑色の輪郭線と、暗色の下塗りや個々のモチーフとの色彩の対比が印象的である。農学部図書室の改築（1986）の際に遺族から寄贈された。（坂本真惟）

今田敬一（1896－1981）KONDA Keiichi

秋田県に生まれ、4歳の時に一家で札幌に移住。札幌一中（現札幌南高校）にて、洋画家林竹治郎に図画を学ぶ。その後、北大の前身である東北帝大農学部林学科にて、森林美学を専攻し、美術部黒百合会に入部。1926年に農学部の助教授、1948年に農学部教授となり、以後1960年の退職まで、本学にとどまる。1925年、全道規模の北海道美術協会（道展）の設立にも中心人物として携わっていた。退職後は、美術批評や北海道美術史について執筆し、北海道美術の発展に貢献した。（坂本真惟）



027 日野謙夫(?-1981)《青い流れ》1963年

キャンパス 油彩 81.0×117.0cm 学務部／クラーク会館 和室A付属室

《青い流れ》

川の流れを描いた作品である。水を表現する青や緑の寒色と、岸辺の赤を中心とした暖色の対比が目に見え、川や岸辺はそれぞれ青、赤を基調としながらも多くの色が重ねられている。画面奥に目を移すにつれ色調は淡くなり、奥から手前にかけて緩やかな流れが表現され、ゆっくりと、しかし確実に過ぎてゆく時の流れを思わせる。画面右下に「Kaneo Hino 63」のサインがある。作者の日野謙夫は元北大職員、2008年の北大美術部黒百合会百周年記念展にも名前を連ねている。(西田真)

第3章

北大に眠る絵画

第3章では、総長室や大会議室などに飾られていたり、建物の改修や改築の関係で一時的に倉庫に保管されていたりして、私たちが通常あまり目にすることのできない作品を紹介します。

北海道立近代美術館の一番の人気作と言ってもよい《朝の祈り》を描いた林竹治郎、有島武郎の小説『生まれ出る悩み』の主人公の画家のモデルといわれ、故郷の岩内を描き続けた木田金次郎など、北海道美術史を語る上で欠かせない画家たちの作品は、北海道大学と北海道画壇との繋がりにについての考察を促すものです。

他方、全く作者不詳でありながら大変すぐれていると判断されるような作品もありました。ShimizuやNakashimaなどの作品は、作者、作品名、制作年、来歴など不明で、今後の調査を待たなければなりませんが、私たちの心をとらえてやみません。

このような作品を埋もれたままにしておかず、その美的、芸術的、文化財的価値を明らかにすることは、学術的に必要であるばかりでなく、本学がこれまで果たしてきた、またこれからも果たすべき文化的役割を検証する上でも大変に重要なことだと思われます。



《工学部校舎》

本作は白聖館の名で親しまれる旧工学部校舎を描いたもの。前景の自転車や通りが荒いタッチで描かれているのに対し、丁寧に描かれた白聖館が目を引き。屋根の重い色彩や壁の柔らかい色合いは、白聖館の学び舎としての落ち着いた行まいを感じさせる。画面左下の「Shu. Ogahara-64」とのサインから、本作は1964年に制作されたことが知られる。小川原は1963年から81年まで北大工学部で非常勤講師を勤めていた。(高橋佳苗)

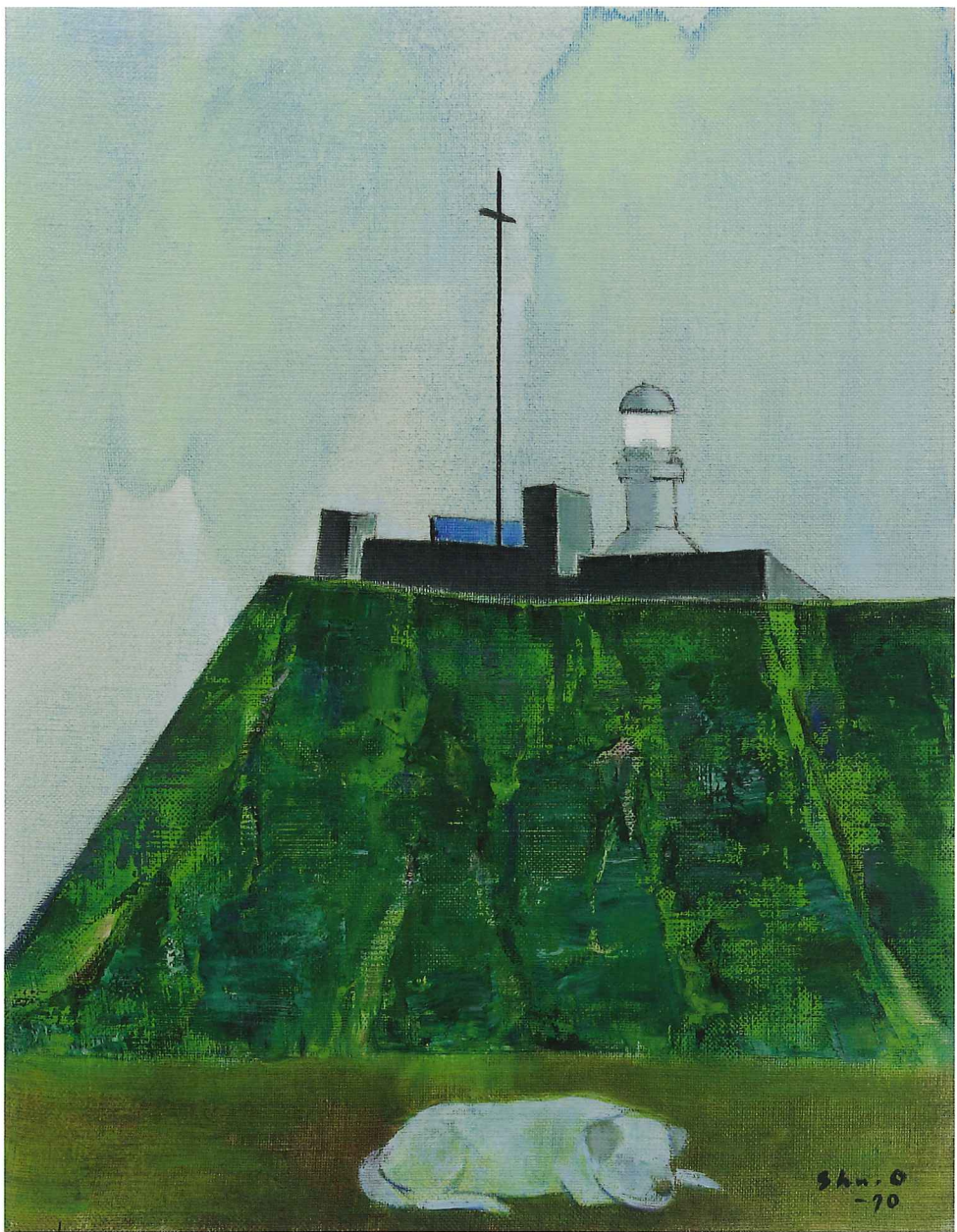
029 小川原脩 (1911-1994) 《工学部校舎》 1964年
キャンバス 油彩 102.0×129.0cm 工学部／同研究科長室



《羊蹄山》

タイトルは、キャンバス裏の「羊蹄山 一九六二・一〇 小川原脩」という表記に基づく。同表記から制作時期は1962年10月と特定できるため、本作は秋の羊蹄山の様子を描いたものと考えられる。本作が描かれた時期、小川原は郷里倶知安で創作活動を行っていた。山頂からふもとにかかる赤と緑のグラデーションが、紅葉によってゆったりと移り変わる山の姿を表現している。影は塗りつぶすように濃くはつきりと描かれ、それによって山の立体感が強調されている。(高橋佳苗)

031 小川原脩 (1911-1994) 《羊蹄山》 1962年
キャンバス 油彩 41.0×53.0cm 工学部／同建築科



030 小川原脩 (1911-1994)

《灯台と犬》 1970年

キャンバス 油彩 53.0×41.0cm

工学部／同秘書室

《灯台と犬》

灯台がたつ丘と目を閉じ横たわる犬が描かれている。これら二つのモチーフは画面を分けるように上下に配置されているが、一方で画面は寒色で統一され、まとまりが感じられる。本作は、画面右下の「Shu. O-70」というサインから、1970年に制作されたと特定できる。この年以降、小川原は犬をモチーフにした作品を多く描いた。他に馬や鶏をモチーフにした作品も残されていることから、この時期小川原が動物を好んで描いていたことがわかる。

(高橋佳苗)



032 小川原脩 (1911-1994)

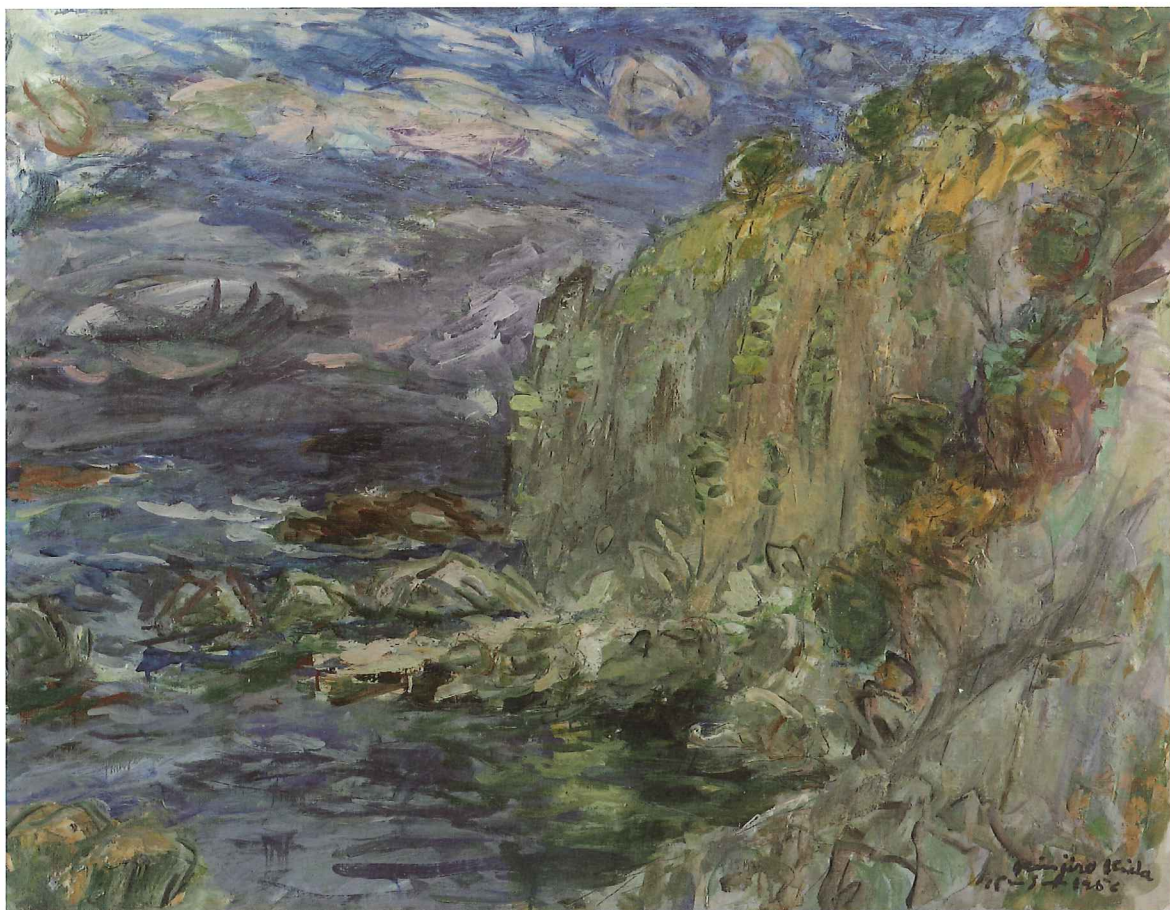
《狩獵する男》 1955年

キャンバス 油彩 161.0×131.0cm

学務部／クラーク会館 和室A付属室

《狩獵する男》

はっきりとした輪郭線と、図形を組み合わせた描き方は、キュビズムの影響を思わせる。男が着ている衣装には、アイヌを思わせる紋様が描きこまれている。本作の制作時期は、画面左下の「Ogahara 55」とのサインにより、1955年と特定できる。1950年以降、《男》(1955)や《狩獵時代》(1955年に北美会展出品)など、小川原が狩獵を題材とした作品を多く残していることから、本作もそうした作品群のひとつと考えられる。そのため、台帳には《アイヌと犬》と記載があったが、《狩獵する男》とタイトルを変更した。(高橋佳苗)



033 木田金次郎 (1893-1962) 《海岸風景》 1956年
キャンバス 油彩 90.5×117.0cm 大学文書館／図書館本館 大会議室

《海岸風景》

木田金次郎は、岩内に生まれ、独学で絵画を学んで、故郷とその近郊の山野や海を多く描いた。本作では、海、空、断崖が共に躍動感あふれる筆致によってとらえられ、木田が自然風景のなかに強い生命力を見出だしていたことを感じさせる。画面左に海、右に絶壁のあるこの景は、《茶津の断崖》(1957年・札幌市所蔵)と一致しており、積丹半島の茶津海岸を描いたものと思われる。「kinjiro kida 1956」のサインがあり、上記札幌市所蔵作より遡る作品となる。(山田のぞみ)



034 坪谷六郎 (1920-2004)

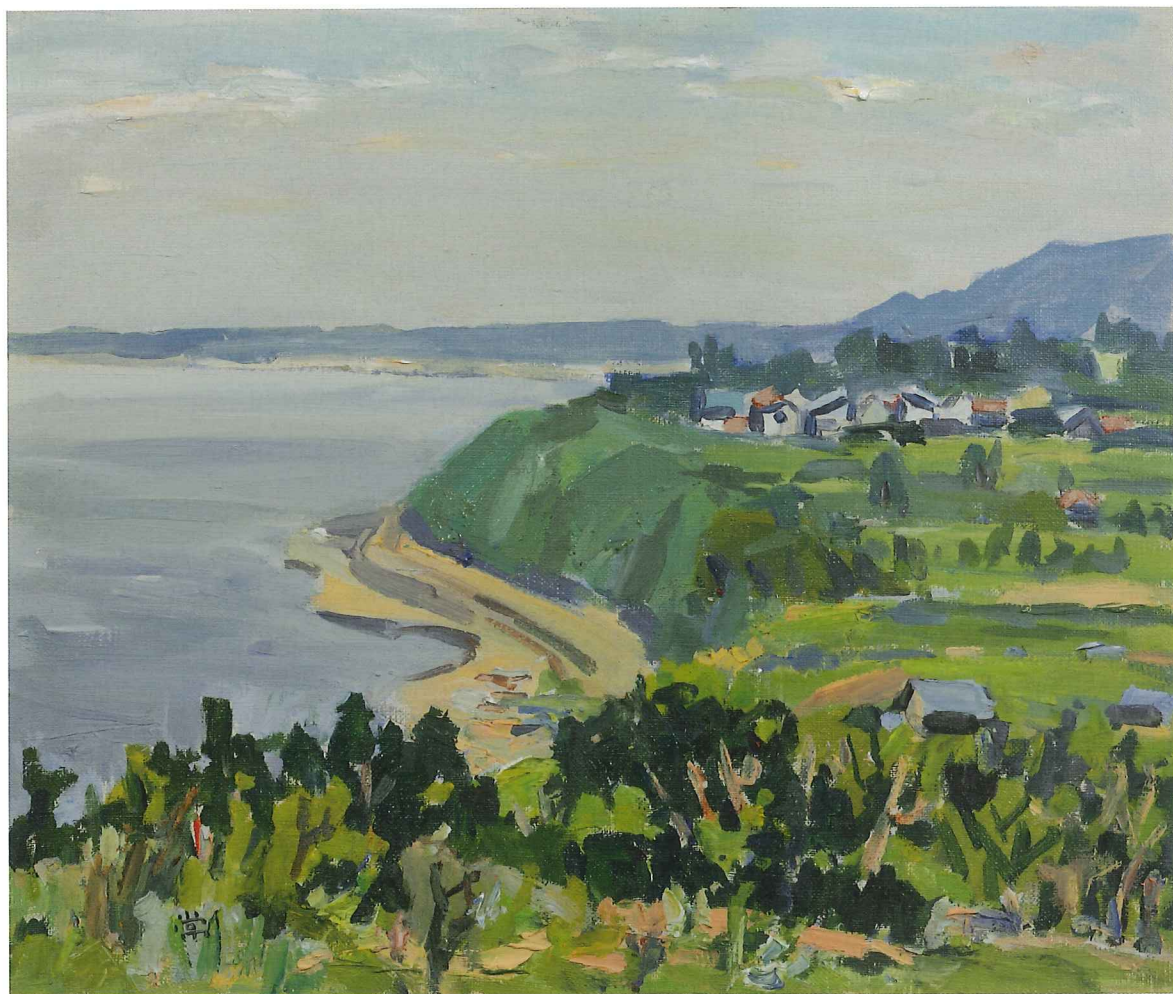
《ダリヤ》1955年

キャンバス 油彩 76.0×64.0cm

大学病院／同放射線科廊下

《ダリヤ》

坪谷六郎は、滝川出身、1949年より岩内協会病院で勤務するかたわら、滝川町立病院へ移るまでの5年間、木田金次郎に絵画の指導を受けた。画面左下の「R. Tsuboya 10,17 '55」のサインから、滝川に移った後の作品と思われる。多様な色や形のダリヤが、重く躍動的なタッチと落ち着いた色調で表現されており、はなやかに気品ある画面となっている。1970年に若林勝初代放射線部部长より贈られ、大学病院地下1階に飾られている。(相良真緒)



035 石塚常男（1910－1985）《石狩遠望》1981年
キャンバス 油彩 38.0×45.5cm 理学部／同本館 研究院長室

《石狩遠望》

石塚常男は、一水会、道展で活躍した小樽の洋画家。石狩湾沿いにある山の頂から海を見下ろし、穏やかな石狩湾の海岸線が遠山の稜線とともに緩やかに伸びている。近景は、草木が豊かに生い茂っている様子が緑色や黄色などの豊かな色彩によって表されて、いくつかの民家が点在しているの見える。画面左下には「常」のサインがある。現在は理学部本館研究院長室に飾られている。（大和田育美）

《雪渓夏日》

高田正二郎は、デザイナー、図案家として名高いが、油彩画もよくしたことが知られる。白馬にアトリエを所有していた高田は、白馬連峰を題材とした作品を数多く描いた。本作では、手前の山々は深い緑で描かれているが、奥の山々は白く描かれている。日本三大雪渓のひとつである白馬大雪渓は夏でも雪が残るというが、かかる情景を描いたものと思われる。画面右下に「Shogiro」のサインがある。伴義雄薬学部長に譲られ、その後本学に寄贈された。（稲田浩徳）



036 高田正二郎（1913－1989）《雪渓夏日》1979年

キャンバス 油彩 50.0×57.7cm 薬学部／同研究院長室

《札幌の町》

描かれたのは「大通南一条教会付近」とされている。柔らかな筆致と淡い色彩で描き出されるのは、みずみずしい緑の芝生、たたずまう白い壁、赤や青の屋根の教会、そしてその前を人々が行き交う、私たちにも馴染み深い初夏の爽やかな札幌の町である。画面右下には「M. matsushima」のサインがあるが、作者の松島正人（後半生は正幸名義）は、深川市生まれの洋画家で、本作のような温かみのある風景画を得意とした。1970年若林勝初代放射線部部長の寄贈品。（藤岡奈緒美）



037 松島正人（1910－1999）《札幌の町》1939－55年

キャンバス 油彩 46.0×54.0cm 大学病院／同放射線科廊下

《小樽風景》

画面右下に「F. nakashima 37 Otaru」のサインがあり、小樽の風景を描いた1937年の作品と思われるが、作者については今のところ不詳とせざるをえない。赤い屋根の家々、白い坂道、はるかにそびえる緑色の山、いずれも簡略なタッチに深みのある明快な色使いで描き出される。画面右に配された一本の樹は、倒れこむように不安定な姿と色合いを示し、坂道へ落とすその暗い影も相まって、画面にはどこか虚無的な雰囲気をもたらされる。

(永谷かのこ)



038 F. Nakashima(サイン表記)《小樽風景》1937年

キャンバス 油彩 41.0×53.5cm 大学本部事務局／同保管庫

《港湾風景》

広がる海と遠くに見える港の様子が描かれている。海には穏やかな波が、青、灰色、黄色によって暗い色調で描かれ、空には雨模様の雲が、白と灰色によって淡彩で描き出されている。画面中央には、白や黄色の帆を広げた数艘の船、さらに送電線、工場のような建物も見られ、はるか遠くに山々が聳えている。人物は描かれず、画面全体は静かであるが、港での人々の営みが船や工場によって想像される。画面左下に「H. Shimizu」のサインがあるが、作者の詳細や制作状況について今のところ知るところがない。

(角野広海)



039 H. Shimizu(サイン表記)《港湾風景》制作年不詳

キャンバス 油彩 65.5×92.0cm 大学本部事務局／同保管庫



040 林竹治郎（1871－1941）《農学部風景》1903年頃
キャンパス 油彩 108.0×169.0cm 大学本部事務局／百年記念会館 ロビー

《農学部風景》

林竹治郎は、宮城県に生まれ、東京美術学校に学んで、札幌一中、藤高等女学校で美術を教え、北海道の洋画黎明期を代表する画家として知られる。本作は札幌農学校時代の尖塔をもつ農学教室や図書館書庫が描かれていることから、大正期から昭和初期の作品と考えられる。画面手前のうっそうと茂るエルムの大木とその作り出す木陰、そこから続く小路によって視線が導かれると、画面奥には光を浴びた農学教室が浮かび上がる。緑に囲まれ、ひっそりとたたずむ理想の学舎としての農学校の姿が描き出されているといえるだろう。（射場亮）



農学部風景 2014年





《夕日の釧路川》

大本靖は、小樽生まれの版画家で、札幌版画協会や北海道版画協会の設立に携わった。北大構内に取材する作品も数多く存在する。本作は、北海道の雄大な自然を描いた版画本『蝦夷廿一景』(1972年刊)のうちの1枚。沈みゆく夕日に赤く染まる空がグラデーションで表現され、色づく空に対して画面手前に広がる釧路川は黒く、忍び寄る夜の気配を感じさせる。左下には「A.P.」(=Artist's Proof)とあり、これは作家が自分の作品だと認めた際に記すものである。(黒田栞)

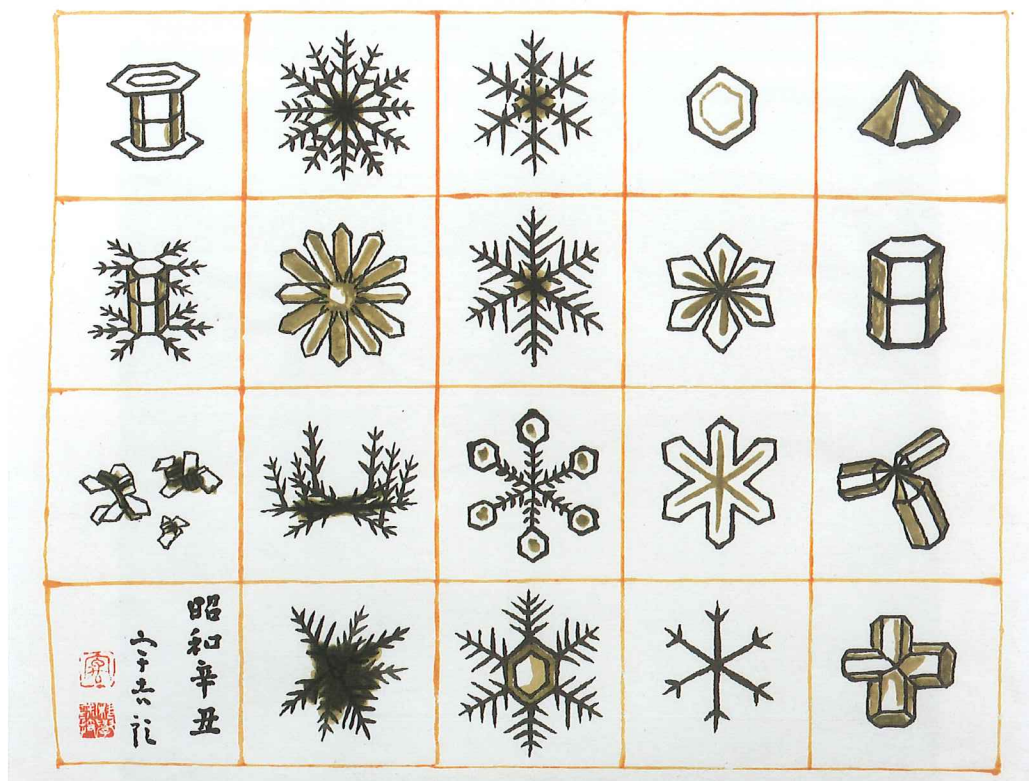
042 大本靖(1926-2014)《夕日の釧路川》1970-72年頃
木版画 27.0×33.0cm 大学本部事務局／同保管庫



《稔の会津(2)》

斎藤清は、福島県会津に生まれ、少年時代を北海道ですごした後、安井曾太郎の木版画作品に触発され、独学で独自の版画技法を確立した。本作は斎藤の故郷会津の伝統的な家屋が実り豊かな稲田とともに描かれている。屋根や道にみられる立体的な造形は、パリなどで学んだ西洋近代絵画の影響も感じさせる。なお本作は1977年に深沢正一工学部教授によって寄贈された。(梅村尚幸)

043 斎藤清(1907-1997)《稔の会津(2)》1975年
木版画 47.5×63.0cm 工学部／同機械科



044 清水義隆（原作：中谷吉郎）

《雪華図説》1961年

ステンシル 36.0×47.0cm

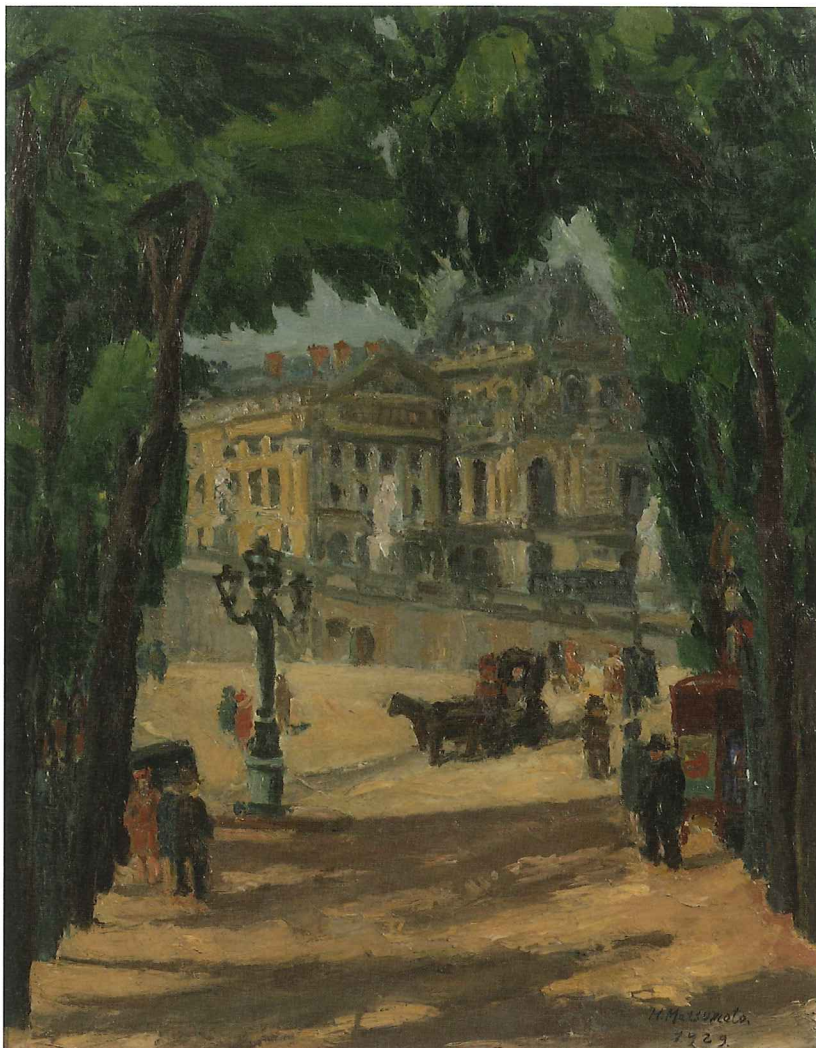
大学本部事務局／同保管庫

《雪華図説》

本作は、雪の結晶の研究で知られる中谷吉郎理学部教授(1900－1962)による墨絵《雪華図説》(1961)を、清水義隆が手刷りで複製したもの。朱色でひかれたマスのなかには、19種類の雪の結晶が、六花型や角柱型などいくつかのパターンごとに、明快な墨線で丁寧に描き分けられている。十種類の墨色と三種類の赤色を使用した手刷りの技術によって、原画の墨の濃淡やニュアンスの変化を再現している。左下のマスにある「昭和辛丑 宇吉郎」の落款は、原作が昭和36年(1961)中谷の手になることを示す。(川岸真由子)

コラム② 眠る美術作品 ―その保管と活用に向けて

今回の調査で初めて陽の目を見る作品も多いが、たとえば、大本靖の版画本『蝦夷廿一景』の1点が本学に所蔵されていることがわかった(作品リスト042《夕日の釧路川》)。大本靖は小樽生まれ、北海道版画協会の設立に携わるなど北海道画壇に重きをなした作家で、2007年には芸術の森美術館で大規模な展覧会も開催されたが、本年(2014)1月借しくも他界した。当該作品は画風の変遷を語るうえに重要な作品の一つとされる。しかし本作は本部事務局の保管庫奥深く、文字どおり眠っていた。もとよりこれまで保管されてきたことを多とせねばならないが、この大本作品に限らず、折角のすぐれた美術作品たちが陽の目を見ずに所蔵部局の保管庫に眠っている現状は、一多分に予想されていたこととはいえながら、作品のためにも、寄贈や購入に携わった先輩たちのためにも、現在の私たちのためにも、はなはだ残念なことと思われる。これらの保存と活用には、一方ならぬ熱意と知恵とが求められるのは言を俟たないけれども、今回の展覧会が、目覚めの時に向けた初めの鐘打であった、と語られる日を信じたい。(鈴木幸人)



045 H. Matsumoto(サイン表記)《並木道》1929年
キャンバス 油彩 92.0×73.0cm 理学部／同本館 大会議室

《並木道》

通りの両側から丈高く伸びる並木の途切れたところに、日の光に照らされた広場と建物が現れる。輪郭が曖昧に描かれた建物とその広場は、豊かに茂る街路樹の葉と幹によってふちどられ、落ち着いた佇まいを見せている。道を横切る馬車や立ち話をしている人々の姿は簡略化された筆致でとらえられている。画面右下には「H. Matsumoto 1929」のサインがある。1929年パリ会議購入作品。(山田のぞみ)



046 J. Moreau(サイン表記)

《街角》1928年

キャンバス 油彩 60.0×81.5cm

理学部／同本館 大会議室

《街角》

季節は秋、閑静な街の一角が描かれる。二本の道がV字に交差した三角地帯には、木々が植えられたささやかな公園があり、胸像が白い台座の上に置かれこの地にゆかりの名士のものであることを思わせる。画面右側から奥へ向かって建物が連なり、最も手前の店には、「VINS(ワイン)」の文字が書かれている。本作には、「J. Moreau 1928」のサインがあるが、作者については今のところ不詳。1929年パリ会議購入作品。(山田のぞみ)

コラム③ パリ会議1929 一学問の土壤への憧れ

1929年の春、14の日本人研究者が、パリに集まった。後年、パリ会議と呼ばれるこの集いに参加したのは、翌年に新設される北海道帝国大学理学部の教授候補者たちだった。ヨーロッパ各地に留学していた彼らは、リュクサンブール公園に近いレストランで一堂に会し、今後の学部運営について話し合ったという。現在、理学部本館に飾られる5点の絵画は、そのパリ滞在中に田所哲太郎教授の発意で入手された。大会議室に《婦人像》(作品リスト014)、《並木道》(同045)、《街角》(同046)、研究院長室には《丘のある風景》(同047)と《帆船》(同049)。いずれも当時のパリで制作されたものである。さらに1点、同室に飾られる《家並み》(同048)も、パリでの購入記録はないものの、描かれた風景は日本のそれとは異なり、西欧ゆかりの作品である可能性が高い。学部新設にあたって、研究室や会議室に飾るべくパリで絵画が購入されたことに、少しの驚きと大いなる憧れを感じる。1929年のパリ会議は、理学部の出発点として記憶されるだけでなく、当時の大学人が抱いていたであろう、遠い地の文化の土壤への憧憬を今に伝える。それはそのまま彼らがめざした学問の理想を示していると思われる。(山田のぞみ)



写真／パリに集まった理学部教授予定者たち
(於リュクサンブール公園)
北海道大学附属図書館 所蔵



048 作者不詳 《家並み》 1929年以前
キャンバス 油彩 60.6×50.0cm
理学部／同本館 研究院長室

《家並み》

田舎の家々をやや高い位置から俯瞰した本作では、南欧などでしばしば見られる素焼きの屋根瓦、テラコッタの温かな橙色と、繁茂する木々の緑が好対照をなしている。手前の低木には桃色の花が咲き、季節は夏を思わせる。夏の微風が吹く、のんびりとした午後のひと時がとらえられている。画面左下にサインが確認できるが現状では解読不能で作者などについて知るところがない。(山田のぞみ)



《丘のある風景》

穏やかな丘陵地帯が、絵筆やパレットナイフをキャンバスに押し付ける力強い筆触で描かれる。草地は絵具が盛り上がるほどに厚塗りされるが、薄曇りの空と白い道は均一に塗られる。水平方向の筆致が丘のなだらかさを表す一方で、中景の垂直な糸杉は単調さを破る工夫となっている。緑を基調とする風景は建物の赤い屋根によって生彩が添えられる。画面左下のサイン「KZ」は、ポーランド人の画家カジミエシュ・ジェレニエフスキのものと考えられる。1918年から翌年にかけて日本に滞在し、有島生馬や黒田清輝と交流があった。1929年パリ会議購入作品。(山田のぞみ)

047 カジミエシュ・ジェレニエフスキ(1888-1930) 《丘のある風景》 1920年代
キャンバス 油彩 50.0×60.6cm 理学部／同本館 研究院長室



049 C. CHARTIER(サイン表記)《帆船》1929年以前

キャンバス 油彩 50.0×60.6cm 理学部／同本館 研究院長室

《帆船》

港に碇泊する船の赤や白の帆が水面に映り揺らめいている。ぼんやりと辺りを照らす光を背にして、小高い丘とその上に塔のシルエットが浮かび上がる。それと呼応するかのように、画面右奥には煙をたなびかせる二本の煙突が見える。工業的モチーフの描き込みや、柔らかに広がる光の表現は、印象派の巨匠たちと時代を共にした画家の作であることを感じさせる。本作の右下には「C. CHARTIER」のサイン、額裏には解説困難であるが「VIE PORT DE MARSEILLE」と読める文字があり、マルセーユ旧港の景色を描いたものと考えられる。1929年パリ会議購入作品。(山田のぞみ)



041 上野春香 (1896-1978)

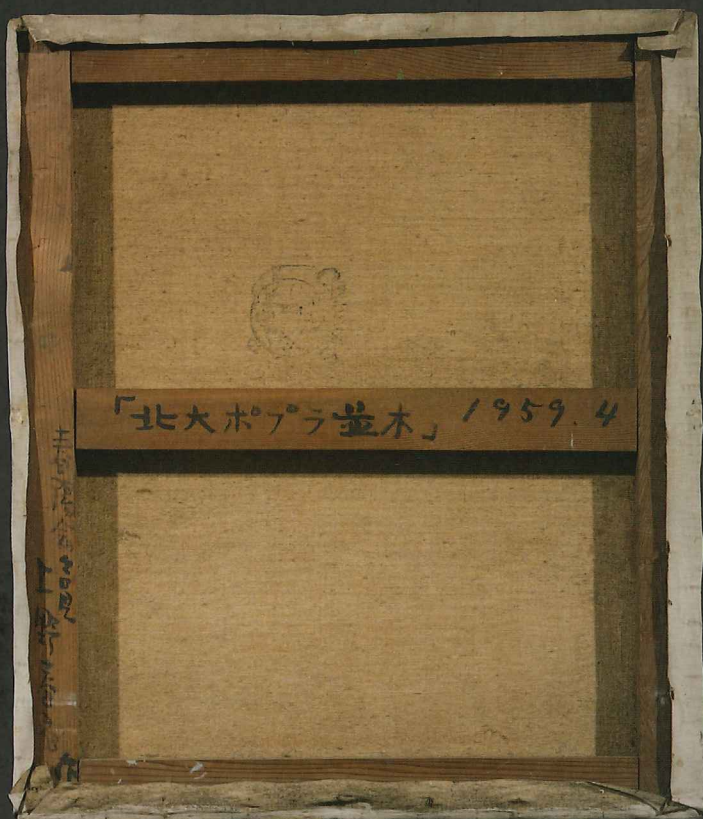
《北大ポプラ並木》1959年

キャンバス 油彩 53.0×45.5cm

学務部/クラーク会館 和室A付属室

《北大ポプラ並木》

上野春香は、札幌出身、春陽会で活躍した洋画家。ポプラの木々は葉をつけていないものの、道のあたりには緑が茂り、空は霞がかかり、春先の景色と思われる。春の訪れとともに芽吹きつつあるポプラ木々は、ところどころ暖かみのある薄茶色や淡い水色を用いつつ、素早く勢いのある筆で描かれている。画面左下に「HARUKA UENO 1959」のサイン、裏面に「春陽会々員 上野春香作」「北大ポプラ並木 1959.4」の記載がある。(川岸真由子)



展示作品リスト

第1章 描かれた北大

	作者	タイトル	制作年	材質 技法	サイズ (縦×横/cm)	所蔵／所在
001	讀谷山朝典	牧場	1981以前	キャンバス 油彩	126.0×159.0	大学本部事務局／同大会議室
002	田邊至	札幌農科大学附属農場写生	1913	板 油彩	23.5×32.5	大学文書館／同資料保管室
003	阿藤秀一郎	北海道大学構内	1935	キャンバス 油彩	24.0×33.0	大学本部事務局／総長室
004	中居定雄	クラーク会館のために	1961	キャンバス 油彩	33.0×41.5	学務部／クラーク会館 和室A付属室
005	繁野三郎	北大農場	1960以前	紙 水彩	40.0×58.0	学務部／クラーク会館 財団事務室
006	野口明	北海道大学（低温研究所）	1966	キャンバス 油彩	55.0×74.5	大学本部事務局／ 百年記念会館 ロビー
007	小野垣哲之助	北大風景	1967	キャンバス 油彩	37.5×46.0	工学部／同事務長室
008	N. ITO（サイン表記）	〔植物園〕	—	キャンバス 油彩	41.0×53.0	大学文書館／同資料保管室
009	S. IGARASHI（サイン表記）	〔第一農場〕	1910	キャンバス 油彩	69.5×80.0	大学文書館／同資料保管室
010	エレンア. M. ジョンソン	クラーク先生像	1960以前	キャンバス 油彩	59.0×50.0	大学本部事務局／総長室
011	五味清吉	〔佐藤昌介肖像画〕	1930	キャンバス 油彩	73.0×61.0	大学文書館／同資料保管室
012	藤雅三	〔黒田清隆肖像画〕	1885	キャンバス 油彩	75.0×56.5	大学文書館／同資料保管室
013	黒田清輝	橋口文蔵肖像画	1924以前	キャンバス 油彩	66.9×51.7	大学文書館／同資料保管室

第2章 北大に生きた画家たち

	作者	タイトル	制作年	材質 技法	サイズ (縦×横/cm)	所蔵／所在
014	近藤七郎	婦人像	1928	キャンバス 油彩	81.0×57.0	理学部／同本館 大会議室
015	近藤七郎	北大ボプラ並木	1936以前	ベニヤ板 油彩	38.0×45.5	農学部／同資料保管庫
016	近藤七郎	街なみ	1929－31頃	キャンバス 油彩	58.7×90.5	農学部／同資料保管庫
017	南条識雄	風景（オタモイ）	1932－47頃	キャンバス 油彩	31.5×40.7	大学病院／看護婦宿舍 「えんれい草」ミーティングルーム
018	池田芳郎	北大工学部	1954以前	キャンバス 油彩	72.0×93.0	工学部／同C211室
019	池田芳郎	校庭	1936	キャンバス 油彩	60.5×90.5	大学文書館／同資料保管室
020	中根孝治	第二農場	1975以前	キャンバス 油彩	60.0×80.0	大学文書館／同資料保管室
021	中根孝治	〔溪谷〕	1975以前	キャンバス 油彩	91.0×73.0	理学部／同本館 大会議室
022	中根孝治	〔金魚鉢のある静物〕	1975以前	キャンバス 油彩	60.0×80.0	工学部／同C212室
023	渡辺勲	碇泊	1961	キャンバス 油彩	64.0×80.0	学務部／高等教育推進機構 中会議室
024	八嶽利郎	旧第二農場	1969	キャンバス 油彩	93.0×119.5	大学本部事務局／ 百年記念会館 ロビー
025	八嶽利郎	北大構内展望	1988	キャンバス 油彩	41.0×53.0	大学本部事務局／ 同事務局長室

芸術学研究室で作成したタイトルは、[]付きで記した。

	作者	タイトル	制作年	材質 技法	サイズ(縦×横/cm)	所蔵／所在
026	美阪恵美子	深緑の頃(北大構内)	1989	キャンバス 油彩	60.5×73.1	大学病院／看護婦宿舎 「えんれい草」ラウンジ
027	日野謙夫	青い流れ	1963	キャンバス 油彩	81.0×117.0	学務部／クラーク会館 和室A付属室
028	今田敬一	卓上静物	1981以前	キャンバス 油彩	100.0×80.0	農学部／同図書館

第3章 北大に眠る絵画

	作者	タイトル	制作年	材質 技法	サイズ(縦×横/cm)	所蔵／所在
029	小川原脩	[工学部校舎]	1964	キャンバス 油彩	102.0×129.0	工学部／同研究科長室
030	小川原脩	[灯台と犬]	1970	キャンバス 油彩	53.0×41.0	工学部／同秘書室
031	小川原脩	羊蹄山	1962	キャンバス 油彩	41.0×53.0	工学部／同建築科
032	小川原脩	[狩猟する男]	1955	キャンバス 油彩	161.0×131.0	学務部／クラーク会館 和室A付属室
033	木田金次郎	海岸風景	1956	キャンバス 油彩	90.5×117.0	大学文書館／図書館本館 大会議室
034	坪谷六郎	ダリヤ	1955	キャンバス 油彩	76.0×64.0	大学病院／同放射線科廊下
035	石塚常男	石狩遠望	1981	キャンバス 油彩	38.0×45.5	理学部／同本館 研究院長室
036	高田正二郎	雪溪夏日	1979	キャンバス 油彩	50.0×57.7	薬学部／同研究院長室
037	松島正人	札幌の町	1939－55頃	キャンバス 油彩	46.0×54.0	大学病院／同放射線科廊下
038	F. Nakashima (サイン表記)	[小樽風景]	1937	キャンバス 油彩	41.0×53.5	大学本部事務局／同保管庫
039	H. Shimizu (サイン表記)	[港湾風景]	—	キャンバス 油彩	65.5×92.0	大学本部事務局／同保管庫
040	林竹治郎	農学部風景	1903頃	キャンバス 油彩	108.0×169.0	大学本部事務局／ 百年記念会館 ロビー
041	上野春香	北大ボグラ並木	1959	キャンバス 油彩	53.0×45.5	学務部／クラーク会館 和室A付属室
042	大本靖	夕日の釧路川	1970－72頃	木版画	27.0×33.0	大学本部事務局／同保管庫
043	斎藤清	稔の会津(2)	1975	木版画	47.5×63.0	工学部／同機械科
044	清水義隆(原作 中谷宇吉郎)	雪華図説	1961	ステンシル	36.0×47.0	大学本部事務局／同保管庫
045	H. Matsumoto (サイン表記)	並木道	1929	キャンバス 油彩	92.0×73.0	理学部／同本館 大会議室
046	J. Moreau (サイン表記)	街角	1928	キャンバス 油彩	60.0×81.5	理学部／同本館 大会議室
047	カジミエシュ・ジェレニエフスキ	丘のある風景	1920年代	キャンバス 油彩	50.0×60.6	理学部／同本館 研究院長室
048	作者不詳	家並み	1929以前	キャンバス 油彩	60.6×50.0	理学部／同本館 研究院長室
049	C. CHARTIER (サイン表記)	帆船	1929以前	キャンバス 油彩	50.0×60.6	理学部／同本館 研究院長室

「美術の北大」プロジェクトの歩み

芸術学研究室修士課程2年 室谷 美里

「大学に所蔵されている美術作品の現状を把握する」このような目的で、当時学部3年生だった野田佳奈子さん（現・北海道立帯広美術館学芸員）を中心に、大学所蔵美術作品の悉皆調査が初めて行われたのは、2011年秋のことである。この調査は、事前に各部局に対して行った所蔵美術品に関するアンケートと、「固定資産台帳^{※1}」の記述をふまえて、実際に作品の展示場所・保管場所へ担当の方に案内して頂き、そこにある作品を1点1点細かに調べるものである。例えば作品を壁から外し、測定した大きさや材質・技法などの基本情報を記録していくと同時に、画面の隅にあるサインやキャンバス裏の記述を写しとり、作者や年代の再検討を行った。

まずは大きな成果の1つとして、パリで購入された《丘のある風景》（作品リスト047）の作者の同定を挙げ、その過程を示したい。台帳には作者の情報はなかったが、画面左下には、明瞭な「KZ」のサインがあった。そこでファーストネームがK、名字がZから始まる画家名を、『20世紀造形芸術家大辞典^{※2}』にて調べたところ、Kazimierz Zieleniewski（1888–1930）が該当した。ポーランド出身でパリに渡り、ナポリで没した画家という。そこで彼の作品画像を調べてみた所、果たしてその画面には《丘のある風景》のものと同一の「KZ」のサイ

ンが記されていたのである。その後、展覧会図録『極東ロシアのモダニズム1918–1928』（五十殿利治ほか編、東京新聞：極東ロシアのモダニズム展実行委員会、2002年）によって更に詳しい情報を得ることができた。彼の名は「カジミェシュ・ジェレニェフスキ」と読み、1918–19年の1年あまりを日本に滞在し、黒田清輝や有島生馬ら日本人画家たちと交流をもっていた。さらには日本を離れた後も石井柏亭あてに作品を送り、二科展に出品をつづけていたという、日本の中央画壇とも関連のある人物であったことが明らかになった。同時に、ジェレニェフスキがパリに渡ったのは1919年のことであり、本展覧会に出品された《丘のある風景》は1929年に理学部教授の田所哲太郎氏がパリで購入した作品であることから、作品の制作年も1919年から29年の間だと推定することができた。この一連の発見は、作品の実見から出発して資料を収集、精査し、作品に隠された歴史を紐解いていく、まさに美術史的な調査による成果だと言えるだろう。

他にも作品の実見を通して、台帳に記載のない情報を多々得ることができた。例えば、《黒田清隆肖像画》（作品リスト012）は、台帳上は作者「不明」とされていた。しかし画面左には「明治十八年春三月 藤雅三謹寫」と記載があり、パリで活躍



した画家藤雅三（1853-1916）が明治18（1885）年に制作した作品であると判明した。藤雅三は、1888年に渡仏し、当時パリで法律を学んでいた黒田清輝を画家の道へ引き入れたことで有名であるが、自身の作品は少数しか残されておらず、画業の詳細はまだ明らかになっていない。2008年には、アメリカで《破れたズボン》（1888年、ジョスリン美術館蔵）が見出され、特に洋画がほとんど残されていない藤の「幻の作品が発見」されたとして注目を集めた。その中で《黒田清隆肖像画》は1888年の渡仏直前の作品だと言えるため、藤が日本画を学んでいた初期の画業と、《破れたズボン》のように高く評価されたパリでの画業とを結ぶ、非常に貴重な作品であると述べることができるだろう。ここでは調査を通して、作品の魅力や価値を再認識し、結果として北大所蔵の作品が、画家の画歴の解明の一助となる可能性に繋がった。

このように大学構内で作品を実見する一方で、歴史資料や文献からの調査も進めている。今年（2014年）は、福島県いわき市を訪れ、本展覧会でも大きく取り上げる札幌農学校出身の画家近藤七郎に関する調査を行った。いわき市は、近藤七郎の故郷であったためである。この調査旅行は北村清彦先生・野田佳奈子さん・坂本真惟さん・筆者の四人で訪れたが、2月9日からの2泊3日の旅程

が、本州の記録的な大雪と重なるという不運に見舞われてしまった。いわき市でもこの影響は大きく、空港での足止めや市内バスの全便運休などにより、近藤七郎の親戚である詩人草野心平に関する調査の一部は断念せざるを得なかった。それでも、いわき市立図書館の蔵書『福島の近代美術』（村山鎮雄著、三好企画、1992年）を参照することで近藤七郎が有島生馬に師事していたことの記述を発見したり、郷土史家である渡辺芳昭氏へのインタビューを通して、近藤七郎の父である白井遠平に関する資料を教えて頂いたりなど、多くの成果が挙げられる。今回は現地を訪れなければならない調査によって、これまで十分な情報を得られていなかった近藤七郎に関する資料の充足を図ることができた。

2014年9月からは、展覧会開催に先駆けて、この調査報告の一端として文学部1階エントランスホール「書香の森」で企画展示が始まった。ここは元来、書物に関する展示を行うスペースだったが、2013年の改修の折に展示ケースが増設され、絵画やパネル資料を展示することが可能になった。オープニング展示の近藤七郎《北大ポプラ並木》《街なみ》（作品リスト015,016）に始まり、今まで4回の展示替えを行ってきた（詳しくは後の年表を参照）。展示する作品の選定や借用作業、解説パネ



ルの作成や実際の展示作業の示作業のほとんどは研究室の皆で担当している。暖かみのある色彩でまとめられたホールの空間と、本が整然と並べられた書棚に、作品がよく調和しており、来訪者にも内部の方々にも好評を頂いている。

また、調査と並行して、展覧会開催に向けた作業も1年ほど前から本格的に行ってきた。大学院生を中心に内容の企画検討を重ねる一方で、実際の作業は学部生を含め研究室全体でのものとなった。例えば、本図録の作品解説は、学生が1人1点以上の作品を担当し、各自が作品の観察や調査を経て執筆したものである。ほかにも各部局に作品を借りに行き、梱包して研究室に運ぶ作業を始め、リストの作成や写真撮影、広報活動や関連イベントの運営など、するべき作業は膨大であったが、先生やデザイナー・カメラマンの方のご指導や助言により、展覧会の開催までたどり着くことができた。

作品がある場所に実際に出向き、自らの眼で状態を観察して記録し、データを作成していくといった調査を公表する展覧会は、まさに「自分たちの手で作り上げた」展覧会であると言えるだろう。3年間に渡って継続されてきた調査は、現在12回を数え、調査した作品数は164点に上った。固定資産台帳に300点以上の作品が登録されていることを鑑みても、調査の及んでいない範囲はまだまだ広いが、本展覧会はその成果の第一歩を示すものと言えるだろう。今後は北海道大学所蔵美術作品のデータベース作成とその活用を目標に、引き続き調査を進めていきたい。

「美術の北大」プロジェクト 活動の歩み

2011/09/28	第1回美術品調査 (大学病院、看護婦宿舎、3点)
12/12	第2回美術品調査 (大学病院、高等教育推進機構、4点)
2012/03/07	第3回美術品調査(農学部、2点)
07/05	第4回美術品調査(大学文書館、12点)
07/12	第5回美術品調査 (事務局、百年記念館、36点)
07/22	第6回美術品調査 (エルムショップ、事務局、20点)
09/12	第7回美術品調査 (大学文書館、図書館本館、4点)
09/25	第8回美術品調査(工学部、26点)
09/27	第9回美術品調査(薬学部、大学病院、16点)
10/04	第10回美術品調査(理学部、7点)
12/06	第11回美術品調査(理学部、13点)
12/20	第12回美術品調査(クラーク会館、19点)
2013/09/24	文学部「書香の森」リニューアルオープン 企画展「美術の北大から」が始まる
09/25	文学部1階「書香の森」にて近藤七郎《北大ポ プラ並木》《街なみ》を展示
2014/01/15	文学部1階「書香の森」にて中根孝治《第二農 場》、田邊至《札幌農科大学付属農場写生》 を展示
02/09～11	いわき調査旅行(北村清彦先生、野田佳奈 子、坂本真惟、室谷美里)
02/09	草野心平生家を訪問。白井遼平(近藤七郎の 父)について調査
02/10	いわきの郷土史家である渡辺芳昭氏にインタ ビュー調査
02/11	いわき市立図書館にて文献調査
04/22	文学部1階「書香の森」にて小野垣哲之助《北 大工学部風景》《吉町先生像》、疋田豊治《白 亜館》(北海道大学総合博物館分館水産科 学館所蔵のガラス乾板よりプリント)を展示
2014/08/25	文学部1階「書香の森」にて館英雄《北大銀杏 並木》を展示

注1 2004年4月に北海道大学が国立大学法人北海道大学となった際に作られた。

注2 Zielonewski, Kasimir, in: Hans Vollmer: Allgemeines Lexikon der bildenden Künstler des XX. Jahrhunderts, Bd. 5. Leipzig 1961, S. 206.

調査報告作品リスト

①作者 ②タイトル ③制作年 ④材質 技法 ⑤サイズ (cm) ⑥所蔵／所在 ⑦調査日
芸術学研究室で作成したタイトルは、[] 付きで記した。

No.001



①美阪恵美子
②深緑の頃(北大構内)
③1989
④キャンバス 油彩
⑤60.5×73.1
⑥大学病院／看護婦宿舎
「えんれい草」ラウンジ
⑦2011/09/28

No.002



①美阪恵美子
②水辺
③1989頃
④キャンバス 油彩
⑤111.9×145.3
⑥大学病院／
同リハビリテーション部
⑦2011/09/28

No.003



①南条識雄
②風景(オタモイ)
③1932-47頃
④キャンバス 油彩
⑤31.5×40.7
⑥大学病院／
看護婦宿舎「えんれい草」
ミーティングルーム
⑦2011/09/28

No.004



①南条識雄
②桃とブドウ
③1968以前
④キャンバス 油彩
⑤24.2×33.2
⑥大学病院／同秘書室
⑦2011/12/12

No.005



①南条識雄
②涙流
③1968以前
④キャンバス 油彩
⑤38.0×45.6
⑥大学病院／同事務部長室
⑦2011/12/12

No.007



①渡辺勲
②「ボプラ並木」
③1961
④キャンバス 油彩
⑤44.1×51.4
⑥学務部／
高等教育推進機構
大会議室
⑦2011/12/12

No.008



①渡辺勲
②碓泊
③1961
④キャンバス 油彩
⑤64.0×80.0
⑥学務部／
高等教育推進機構
中会議室
⑦2011/12/12

No.009



①近藤七郎
②街なみ
③1929-31
④キャンバス 油彩
⑤58.7×90.5
⑥農学部／同資料保管庫
⑦2012/03/07

No.010



①近藤七郎
②北大ボプラ並木
③1936以前
④ベニヤ板 油彩
⑤38.0×45.5
⑥農学部／同資料保管庫
⑦2012/03/07

No.011



①黒田清輝
②橋口文蔵肖像画
③1924以前
④キャンバス 油彩
⑤66.9×51.7
⑥大学文書館／
同資料保管室
⑦2013/07/05

No.012



①小笠原豊涯
②森源三肖像画
③1903
④キャンバス 油彩
⑤76.0×58.0
⑥大学文書館／
同資料保管室
⑦2013/07/05

No.013



①作者不詳
②クラーク肖像画
③不詳
④紙 インク
⑤36.0×29.5
⑥大学文書館／
同資料保管室
⑦2013/07/05

No.014



①田邊至
②札幌農科大学附属
農場写生
③1913
④板 油彩
⑤23.5×32.5
⑥大学文書館／
同資料保管室
⑦2013/07/05

No.015



①horie. g(サイン表記)
②田口敬作肖像画
③不詳
④キャンバス 油彩
⑤74.0×62.0
⑥大学文書館／
同資料保管室
⑦2013/07/05

No.016



①作者不詳
②手島寅雄肖像画
③不詳
④キャンバス 油彩
⑤60.0×50.5
⑥大学文書館／
同資料保管室
⑦2013/07/05

①作者 ②タイトル ③制作年 ④材質 技法 ⑤サイズ (cm) ⑥所蔵/所在 ⑦調査日

No.017



- ① Wada, K(サイン表記)
② 星野勇三肖像画
③ 不詳
④ キャンバス 油彩
⑤ 53.5×45.5
⑥ 大学文書館/
同資料保管室
⑦ 2013/07/05

No.018



- ① 中根孝治
② 第二農場
③ 1975以前
④ キャンバス 油彩
⑤ 60.0×80.0
⑥ 大学文書館/
同資料保管室
⑦ 2013/07/05

No.019



- ① S. IGARASHI
(サイン表記)
② [第一農場]
③ 1910
④ キャンバス 油彩
⑤ 69.5×80.0
⑥ 大学文書館/
同資料保管室
⑦ 2013/07/05

No.020



- ① 池田芳郎
② 校庭
③ 1936
④ キャンバス 油彩
⑤ 60.5×90.5
⑥ 大学文書館/
同資料保管室
⑦ 2013/07/05

No.021



- ① N. ITO(サイン表記)
② [植物園]
③ 不詳
④ キャンバス 油彩
⑤ 41.0×53.0
⑥ 大学文書館/
同資料保管室
⑦ 2013/07/05

No.022



- ① 五味清吉
② [佐藤昌介肖像画]
③ 1930
④ キャンバス 油彩
⑤ 73.0×61.0
⑥ 大学文書館/
同資料保管室
⑦ 2013/07/05

No.023



- ① 阿藤秀一郎
② 北海道大学構内
③ 1935
④ キャンバス 油彩
⑤ 24.0×33.0
⑥ 大学本部事務局/総長室
⑦ 2013/07/12

No.024



- ① 富樫正雄
② 芽吹く新緑のニレ
③ 1987
④ キャンバス 油彩
⑤ 52.5×45.0
⑥ 大学本部事務局/総長室
⑦ 2013/07/12

No.025



- ① エレノア, M. ジョンソン
② クラーク先生像
③ 1960以前
④ キャンバス 油彩
⑤ 59.0×50.0
⑥ 大学本部事務局/総長室
⑦ 2013/07/12

No.026



- ① 八嶺利郎
② 北大構内展望
③ 1988
④ キャンバス 油彩
⑤ 41.0×53.0
⑥ 大学本部事務局/
同事務局長室
⑦ 2013/07/12

No.027



- ① 川合玉堂
② [柳にカワセミ]
③ 1957以前
④ 絹本墨画淡彩
⑤ 32.0×47.0
⑥ 大学本部事務局/
同事務局長室
⑦ 2013/07/12

No.028



- ① 川合玉堂
② 峰の夕
③ 1935
④ 絹本墨画淡彩
⑤ 72.0×98.0
⑥ 大学本部事務局/総長室
⑦ 2013/07/12

No.029



- ① ヘルムート・ウォルン
② [雪山と木々]
③ 不詳
④ 紙 水彩
⑤ 40.0×51.0
⑥ 大学本部事務局/
同小会議室
⑦ 2013/07/12

No.030



- ① グルスチェンコ
② 若葉が萌えて
③ 不詳
④ キャンバス 油彩
⑤ 79.7×100.5
⑥ 大学本部事務局/
同小会議室
⑦ 2013/07/12

No.031



- ① 熊谷邦子
② 木陰
③ 2011以前
④ キャンバス 油彩
⑤ 162.0×130.0
⑥ 大学本部事務局/
学術交流会館 ロビー
⑦ 2013/07/12

No.032



- ①熊谷邦子
- ②モデルたち
- ③1975頃
- ④キャンバス 油彩
- ⑤117.0×91.0
- ⑥大学本部事務局／
学術交流会館 ロビー
- ⑦2013/07/12

No.033



- ①野口明
- ②北海道大学(低温研究所)
- ③1966
- ④キャンバス 油彩
- ⑤55.0×74.5
- ⑥大学本部事務局／
百年記念会館 ロビー
- ⑦2013/07/12

No.034



- ①作者不詳
- ②[秋の湖]
- ③不詳
- ④キャンバス 油彩
- ⑤不詳
- ⑥大学本部事務局／
百年記念会館 ロビー
- ⑦2013/07/12

No.035



- ①林竹治郎
- ②農学部風景
- ③1903頃
- ④キャンバス 油彩
- ⑤108.0×169.0
- ⑥大学本部事務局／
百年記念会館 ロビー
- ⑦2013/07/12

No.036



- ①八鍬利郎
- ②旧第二農場
- ③1969
- ④キャンバス 油彩
- ⑤93.0×119.5
- ⑥大学本部事務局／
百年記念会館 ロビー
- ⑦2013/07/12

No.037



- ①久保守
- ②佐藤昌介肖像画
- ③1966頃
- ④キャンバス 油彩
- ⑤82.0×66.0
- ⑥大学本部事務局／
百年記念会館 大会議室
- ⑦2013/07/12

No.038



- ①久保守
- ②南郷次郎肖像画
- ③1966頃
- ④キャンバス 油彩
- ⑤82.0×66.0
- ⑥大学本部事務局／
百年記念会館 大会議室
- ⑦2013/07/12

No.039



- ①久保守
- ②高岡熊雄肖像画
- ③1966頃
- ④キャンバス 油彩
- ⑤82.0×66.0
- ⑥大学本部事務局／
百年記念会館 大会議室
- ⑦2013/07/12

No.040



- ①久保守
- ②今裕肖像画
- ③1966頃
- ④キャンバス 油彩
- ⑤82.0×66.0
- ⑥大学本部事務局／
百年記念会館 大会議室
- ⑦2013/07/12

No.041



- ①久保守
- ②伊藤誠哉肖像画
- ③1966頃
- ④キャンバス 油彩
- ⑤82.0×66.0
- ⑥大学本部事務局／
百年記念会館 大会議室
- ⑦2013/07/12

No.042



- ①久保守
- ②島善郷肖像画
- ③1966頃
- ④キャンバス 油彩
- ⑤82.0×66.0
- ⑥大学本部事務局／
百年記念会館 大会議室
- ⑦2013/07/12

No.043



- ①久保守
- ②杉野目晴貞肖像画
- ③1966頃
- ④キャンバス 油彩
- ⑤82.0×66.0
- ⑥大学本部事務局／
百年記念会館 大会議室
- ⑦2013/07/12

No.044



- ①久保守
- ②古市二郎肖像画
- ③1966頃
- ④キャンバス 油彩
- ⑤82.0×66.0
- ⑥大学本部事務局／
百年記念会館 大会議室
- ⑦2013/07/12

No.045



- ①高田正二郎
- ②堀内寿郎肖像画
- ③1978-86頃
- ④キャンバス 油彩
- ⑤82.0×66.0
- ⑥大学本部事務局／
百年記念会館 大会議室
- ⑦2013/07/12

No.046



- ①高田正二郎
- ②丹羽貴知蔵肖像画
- ③1978-86頃
- ④キャンバス 油彩
- ⑤82.0×66.0
- ⑥大学本部事務局／
百年記念会館 大会議室
- ⑦2013/07/12

①作者 ②タイトル ③制作年 ④材質 技法 ⑤サイズ (cm) ⑥所蔵/所在 ⑦調査日

No.047



- ①高田正二郎
- ②今村成和肖像画
- ③1978-86頃
- ④キャンバス 油彩
- ⑤82.0×66.0
- ⑥大学本部事務局/
百年記念会館 大会議室
- ⑦2013/07/12

No.048



- ①YANAGISAWA
(サイン表記)
- ②有江幹男肖像画
- ③不詳
- ④キャンバス 油彩
- ⑤82.0×66.0
- ⑥大学本部事務局/
百年記念会館 大会議室
- ⑦2013/07/12

No.049



- ①作者不詳
- ②伴義雄肖像画
- ③不詳
- ④キャンバス 油彩
- ⑤82.0×66.0
- ⑥大学本部事務局/
百年記念会館 大会議室
- ⑦2013/07/12

No.050



- ①S. KARINO(サイン表記)
- ②廣重力肖像画
- ③不詳
- ④キャンバス 油彩
- ⑤82.0×66.0
- ⑥大学本部事務局/
百年記念会館 大会議室
- ⑦2013/07/12

No.051



- ①湯山俊久
- ②丹保憲仁肖像画
- ③不詳
- ④キャンバス 油彩
- ⑤82.0×66.0
- ⑥大学本部事務局/
百年記念会館 大会議室
- ⑦2013/07/12

No.052



- ①作者不詳
- ②朱鞠内湖
- ③不詳
- ④紙 木炭 水彩
- ⑤40.0×45.0
- ⑥大学本部事務局/
同保管庫
- ⑦2013/07/12

No.053



- ①作者不詳
- ②[山の麓]
- ③不詳
- ④キャンバス 油彩
- ⑤50.0×57.5
- ⑥大学本部事務局/
同保管庫
- ⑦2013/07/12

No.054



- ①作者不詳
- ②碧い海
- ③不詳
- ④シルクスクリーン
- ⑤49.0×64.5
- ⑥大学本部事務局/
同保管庫
- ⑦2013/07/12

No.055



- ①清水義隆
(原作: 中谷宇吉郎)
- ②雪華図説
- ③1961
- ④ステンシル
- ⑤36.0×47.0
- ⑥大学本部事務局/
同保管庫
- ⑦2013/07/12

No.056



- ①長谷川傳
- ②函館夜光
- ③不詳
- ④キャンバス 油彩
- ⑤53.3×65.5
- ⑥大学本部事務局/
同保管庫
- ⑦2013/07/12

No.057



- ①清水敦
- ②[木立]
- ③1963頃
- ④版画
- ⑤20.0×35.0
- ⑥大学本部事務局/
同保管庫
- ⑦2013/07/12

No.058



- ①田中太郎
- ②[湖]
- ③不詳
- ④キャンバス 油彩
- ⑤45.0×53.0
- ⑥大学本部事務局/
同保管庫
- ⑦2013/07/12

No.059



- ①讀谷山朝典
- ②牧場の一隅
- ③1981以前
- ④キャンバス 油彩
- ⑤109.5×145.5
- ⑥大学本部事務局/
同財務部長室
- ⑦2013/07/22

No.060



- ①八鐵利郎
- ②春の古河講堂
- ③1970-85頃
- ④キャンバス 油彩
- ⑤24.2×33.3
- ⑥大学本部事務局/
エルムショップ
- ⑦2013/07/22

No.061



- ①八鐵利郎
- ②エルムと北大農学部
- ③1970-85頃
- ④キャンバス 油彩
- ⑤53.0×45.5
- ⑥大学本部事務局/
エルムショップ
- ⑦2013/07/22

No.062



- ① 富樫正雄
② ニレ
③ 1983頃
④ キャンバス 油彩
⑤ 80.0×64.8
⑥ 大学本部事務局/
エルムショップ
⑦ 2013/07/22

No.063



- ① 日野謙夫
② ほのかに匂う
花のうた連作の内
③ 1967
④ キャンバス アクリル絵具
⑤ 79.0×98.5
⑥ 大学本部事務局/
同保管庫
⑦ 2013/07/22

No.064



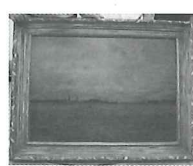
- ① 日野謙夫
② 野ばらのうた
花のうた連作の内
③ 1969
④ キャンバス アクリル絵具
⑤ 77.5×98.7
⑥ 大学本部事務局/
同保管庫
⑦ 2013/07/22

No.065



- ① 小川原脩
② 犬と雪山
③ 1970-71
④ キャンバス 油彩
⑤ 116.7×91.0
⑥ 大学本部事務局/
同保管庫
⑦ 2013/07/22

No.066



- ① H. Shimizu(サイン表記)
② [港湾風景]
③ 不詳
④ キャンバス 油彩
⑤ 65.5×92.0
⑥ 大学本部事務局/
同保管庫
⑦ 2013/07/22

No.067



- ① Sasanuma浩(サイン表記)
② [黄色い花のある風景]
③ 不詳
④ キャンバス 油彩
⑤ 51.0×66.0
⑥ 大学本部事務局/
同保管庫
⑦ 2013/07/22

No.068



- ① ayako iwata(サイン表記)
② [抽象画]
③ 不詳
④ キャンバス 油彩
⑤ 74.5×93.0
⑥ 大学本部事務局/
同保管庫
⑦ 2013/07/22

No.069



- ① F. Nakashima
(サイン表記)
② [小樽風景]
③ 不詳
④ キャンバス 油彩
⑤ 41.0×53.5
⑥ 大学本部事務局/
同保管庫
⑦ 2013/07/22

No.070



- ① ヘルムート・ウオルン
② [秋の山間]
③ 1966
④ 紙 水彩
⑤ 22.0×37.0
⑥ 大学本部事務局/
同保管庫
⑦ 2013/07/22

No.071



- ① 作者不詳
② [山と湖]
③ 不詳
④ キャンバス 油彩
⑤ 46.0×61.0
⑥ 大学本部事務局/
同保管庫
⑦ 2013/07/22

No.072



- ① DEGUCHI(サイン表記)
② [山間]
③ 1958
④ キャンバス 油彩
⑤ 45.5×53.0
⑥ 大学本部事務局/
同保管庫
⑦ 2013/07/22

No.073



- ① 大本靖
② 夕日の鯛路川
③ 1970-72頃
④ 木版画
⑤ 27.0×33.0
⑥ 大学本部事務局/
同保管庫
⑦ 2013/07/22

No.074



- ① 桂子(サイン表記)
② 都ぞ弥生
③ 不詳
④ 書
⑤ 不詳
⑥ 大学本部事務局/
同第一会議室B
⑦ 2013/07/22

No.075



- ① 八鐵利郎
② 春のボプラ並木
③ 1992以前
④ キャンバス 油彩
⑤ 56.5×48.0
⑥ 大学本部事務局/
同第一会議室A
⑦ 2013/07/22

No.076



- ① 小川原脩
② [秋の山岳]
③ 1951
④ キャンバス 油彩
⑤ 53.0×80.3
⑥ 大学本部事務局/
同特別会議室
⑦ 2013/07/22

①作者 ②タイトル ③制作年 ④材質 技法 ⑤サイズ (cm) ⑥所蔵／所在 ⑦調査日

No.077



- ①川島理一郎
- ②御徳大佛寺
- ③1971以前
- ④キャンバス 油彩
- ⑤66.0×82.5
- ⑥大学本部事務局／
同特別会議室
- ⑦2013/07/22

No.078



- ①讀谷山朝典
- ②牧場
- ③1981以前
- ④キャンバス 油彩
- ⑤126.0×159.0
- ⑥大学本部事務局／
同大会議室
- ⑦2013/07/22

No.079



- ①藤雅三
- ②黒田清隆肖像画
- ③1885
- ④キャンバス 油彩
- ⑤75.0×56.5
- ⑥大学文書館／
同資料保管室
- ⑦2013/09/12

No.080



- ①阿藤秀一郎
- ②南鷹次郎肖像画
- ③1933
- ④キャンバス 油彩
- ⑤73.0×61.0
- ⑥大学文書館／
同資料保管室
- ⑦2013/09/12

No.081



- ①wada(サイン表記)
- ②高岡熊雄肖像画
- ③1961以前
- ④キャンバス 油彩
- ⑤73.0×61.0
- ⑥大学文書館／
同資料保管室
- ⑦2013/09/12

No.082



- ①木田金次郎
- ②海岸風景
- ③1956
- ④キャンバス 油彩
- ⑤90.5×117.0
- ⑥大学文書館／
図書館本館 大会議室
- ⑦2013/09/12

No.083



- ①小川原脩
- ②羊蹄山
- ③1962
- ④キャンバス 油彩
- ⑤41.0×53.0
- ⑥工学部／同建築科
- ⑦2013/09/25

No.084



- ①新徳栄蔵
- ②サイロの雪冠り
- ③1986
- ④キャンバス 油彩
- ⑤38.0×45.5
- ⑥工学部／同建築科
- ⑦2013/09/25

No.085



- ①作者不詳
- ②[花]
- ③不詳
- ④キャンバス 油彩
- ⑤不詳
- ⑥工学部／同窓会室
- ⑦2013/09/25

No.086



- ①小川原脩
- ②灯台と犬
- ③1970
- ④キャンバス 油彩
- ⑤53.0×41.0
- ⑥工学部／同秘書室
- ⑦2013/09/25

No.087



- ①小野垣哲之助
- ②吉村先生像
- ③不詳
- ④キャンバス 油彩
- ⑤36.0×45.0
- ⑥工学部／同研究科長室
- ⑦2013/09/25

No.088



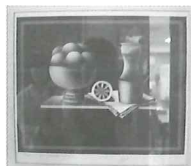
- ①小川原脩
- ②工学部校舎
- ③1964
- ④キャンバス 油彩
- ⑤102.0×129.0
- ⑥工学部／同研究科長室
- ⑦2013/09/25

No.089



- ①小野垣哲之助
- ②北大風景
- ③1967
- ④キャンバス 油彩
- ⑤37.5×46.0
- ⑥工学部／同事務長室
- ⑦2013/09/25

No.090



- ①AVATI(サイン表記)
- ②夏のレモン
- ③不詳
- ④版画
- ⑤30.0×35.0
- ⑥工学部／同機械科
- ⑦2013/09/25

No.091



- ①斎藤清
- ②窓の会津(2)
- ③1975
- ④木版画
- ⑤47.5×63.0
- ⑥工学部／同機械科
- ⑦2013/09/25

No.092



- ①斎藤清
- ②STEADY GAZE(B)
- ③1957
- ④木版画
- ⑤77.0×47.0
- ⑥工学部/同機械科
- ⑦2013/09/25

No.093



- ①星光一
- ②モデルバーンと牛
- ③1984
- ④キャンバス 油彩
- ⑤81.0×99.5
- ⑥工学部/同C211室
- ⑦2013/09/25

No.094



- ①日野謙夫
- ②やぎ
- ③1962以前
- ④キャンバス 油彩
- ⑤102.5×75.5
- ⑥工学部/同C211室
- ⑦2013/09/25

No.095



- ①大宮健嗣
- ②北の海(飛ぶ)
- ③1981
- ④版画
- ⑤72.5×91.0
- ⑥工学部/同C211室
- ⑦2013/09/25

No.096



- ①池田芳郎
- ②北大工学部
- ③1954以前
- ④キャンバス 油彩
- ⑤72.0×93.0
- ⑥工学部/同C211室
- ⑦2013/09/25

No.097



- ①中根孝治
- ②[山の麓の街]
- ③1975以前
- ④キャンバス 油彩
- ⑤45.5×53.0
- ⑥工学部/同C211室
- ⑦2013/09/25

No.098



- ①八嶽利郎
- ②漁港(函館)
- ③1992以前
- ④キャンバス 油彩
- ⑤97.0×123.0
- ⑥工学部/同C211室
- ⑦2013/09/25

No.099



- ①中根孝治
- ②[冬の木]
- ③1975以前
- ④キャンバス 油彩
- ⑤44.0×52.0
- ⑥工学部/同C211室
- ⑦2013/09/25

No.100



- ①S. Morioka(サイン表記)
- ②[果物のある静物]
- ③1931
- ④紙 水彩
- ⑤74.0×92.0
- ⑥工学部/同C211室
- ⑦2013/09/25

No.101



- ①中根孝治
- ②[薔薇]
- ③1954以前
- ④キャンバス 油彩
- ⑤45.5×53.5
- ⑥工学部/同C211室
- ⑦2013/09/25

No.102



- ①中根孝治
- ②とわに還らず
- ③1975以前
- ④キャンバス 油彩
- ⑤72.0×90.0
- ⑥工学部/同C211室
- ⑦2013/09/25

No.103



- ①S. Morioka(サイン表記)
- ②[冬の林]
- ③1931
- ④紙 水彩
- ⑤72.0×92.0
- ⑥工学部/同C211室
- ⑦2013/09/25

No.104



- ①中根孝治
- ②[入り江]
- ③1975以前
- ④キャンバス 油彩
- ⑤91.0×116.7
- ⑥工学部/同C211室
- ⑦2013/09/25

No.105



- ①作者不詳
- ②[雪山脈]
- ③不詳
- ④キャンバス 油彩
- ⑤118.5×93.5
- ⑥工学部/同C211室
- ⑦2013/09/25

No.106



- ①S. Morioka(サイン表記)
- ②[かごのある静物]
- ③1931
- ④紙 水彩
- ⑤70.0×85.0
- ⑥工学部/同C211室
- ⑦2013/09/25

①作者 ②タイトル ③制作年 ④材質 技法 ⑤サイズ (cm) ⑥所蔵／所在 ⑦調査日

No.107



①中根孝治
②[雄]
③1975以前
④キャンバス 油彩
⑤57.0×69.0
⑥工学部／同C211室
⑦2013/09/25

No.108



①中根孝治
②[金魚鉢のある静物]
③1975以前
④キャンバス 油彩
⑤60.0×80.0
⑥工学部／同C211室
⑦2013/09/25

No.109



①金子博信
②睡蓮の花
③1979
④キャンバス 油彩
⑤129.5×164.0
⑥薬学部／同会議室
⑦2013/09/27

No.110



①館英雄
②北大銀杏並木
③1991
④キャンバス 油彩
⑤59.0×72.0
⑥薬学部／同研究院長室
⑦2013/09/27

No.111



①高田正二郎
②雪溪夏日
③1979
④キャンバス 油彩
⑤50.0×57.7
⑥薬学部／同研究院長室
⑦2013/09/27

No.112



①清田操
②或る進化論
③1994頃
④キャンバス 油彩
⑤162.0×194.0
⑥薬学部／同保管庫
⑦2013/09/27

No.113



①坪谷六郎
②杏の里
③2004以前
④キャンバス 油彩
⑤129.0×161.5
⑥大学病院／同廊下
⑦2013/09/27

No.114



①金井箕江香
②夢3
③不詳
④キャンバス 油彩
⑤115.5×91.0
⑥大学病院／同廊下
⑦2013/09/27

No.115



①山崎恵美
②エネルギー
③不詳
④キャンバス 油彩
⑤71.0×91.5
⑥大学病院／同廊下
⑦2013/09/27

No.116



①高村郁世
②恵庭の春
③2009以前
④紙 水彩 色鉛筆
⑤93.5×114.5
⑥大学病院／同廊下
⑦2013/09/27

No.117



①西條正一
②紅牡丹
③1983以前
④紙 岩絵具
⑤50.5×64.0
⑥大学病院／同廊下
⑦2013/09/27

No.118



①種市城次郎
②ノートルダム寺院
③1982
④キャンバス 油彩
⑤192.0×111.0
⑥大学病院／同放射線科廊下
⑦2013/09/27

No.119



①広瀬次
②昔、遠足に行った丘
③1997
④キャンバス 油彩
⑤130.0×161.0
⑥大学病院／同放射線科廊下
⑦2013/09/27

No.120



①石井正二
②[山]
③1970以前
④キャンバス 油彩
⑤73.5×92.0
⑥大学病院／同放射線科廊下
⑦2013/09/27

No.121



①坪谷六郎
②ダリヤ
③1955
④キャンバス 油彩
⑤73.0×60.5
⑥大学病院／同放射線科廊下
⑦2013/09/27

No.122



- ① 石井正二
- ② 岬
- ③ 1970以前
- ④ キャンバス 油彩
- ⑤ 41.0×48.5
- ⑥ 大学病院/
同放射線科廊下
- ⑦ 2013/09/27

No.123



- ① 大江祐三
- ② 知床の夕風
- ③ 1967
- ④ キャンバス 油彩
- ⑤ 134.0×166.5
- ⑥ 大学病院/
同放射線科廊下
- ⑦ 2013/09/27

No.124



- ① 松島正人
- ② 札幌の町
- ③ 1939-55
- ④ キャンバス 油彩
- ⑤ 46.0×54.0
- ⑥ 大学病院/
同放射線科廊下
- ⑦ 2013/09/27

No.125



- ① C. CHARTIER
(サイン表記)
- ② 帆船
- ③ 1929以前
- ④ キャンバス 油彩
- ⑤ 50.0×60.6
- ⑥ 理学部/
同本館 研究院長室
- ⑦ 2013/10/04

No.126



- ① 作者不詳
- ② 家並み
- ③ 不詳
- ④ キャンバス 油彩
- ⑤ 60.6×50.0
- ⑥ 理学部/同本館
研究院長室
- ⑦ 2013/10/04

No.127



- ① 石塚常男
- ② 石狩遠望
- ③ 1981
- ④ キャンバス 油彩
- ⑤ 38.0×45.5
- ⑥ 理学部/同本館
研究院長室
- ⑦ 2013/10/04

No.128



- ① 作者不詳
- ② 丘のある風景
- ③ 1929以前
- ④ キャンバス 油彩
- ⑤ 50.0×60.6
- ⑥ 理学部/同本館
研究院長室
- ⑦ 2013/10/04

No.129



- ① 近藤七郎
- ② 婦人像
- ③ 1928
- ④ キャンバス 油彩
- ⑤ 81.0×57.0
- ⑥ 理学部/同本館
大会議室
- ⑦ 2013/10/04

No.130



- ① H. Matsumoto
(サイン表記)
- ② 並木道
- ③ 1929
- ④ キャンバス 油彩
- ⑤ 92.0×73.0
- ⑥ 理学部/同本館
大会議室
- ⑦ 2013/10/04

No.131



- ① J. Moreau(サイン表記)
- ② 街角
- ③ 1928
- ④ キャンバス 油彩
- ⑤ 60.0×81.5
- ⑥ 理学部/同本館
大会議室
- ⑦ 2013/10/04

No.132



- ① 市川純彦
- ② 静物
- ③ 1991以前
- ④ キャンバス 油彩
- ⑤ 41.0×53.0
- ⑥ 理学部/同本館
小会議室
- ⑦ 2013/12/06

No.133



- ① 池田芳郎
- ② ギリシャの風景
- ③ 1992以前
- ④ キャンバス 油彩
- ⑤ 41.0×32.0
- ⑥ 理学部/同N226A室
- ⑦ 2013/12/06

No.134



- ① 池田芳郎
- ② 礼文島海岸の景色
- ③ 1992以前
- ④ キャンバス 油彩
- ⑤ 38.0×45.5
- ⑥ 理学部/同N227A室
- ⑦ 2013/12/06

No.135



- ① 片桐千明
- ② 忍路湾風景
- ③ 1999
- ④ 紙 水彩
- ⑤ 32.5×42.0
- ⑥ 理学部/同大講堂前
- ⑦ 2013/12/06

No.136



- ① 八木健三
- ② 新緑の暑寒別連峯
- ③ 1996
- ④ 紙 水彩
- ⑤ 27.0×37.5
- ⑥ 理学部/同大講堂前
- ⑦ 2013/12/06

①作者 ②タイトル ③制作年 ④材質 技法 ⑤サイズ (cm) ⑥所蔵/所在 ⑦調査日

No.137



①J. Burns(サイン表記)
②Ozawa Pavilion - Alberta
③1996
④版画
⑤28.5×35.0
⑥理学部/同大講堂前
⑦2013/12/06

No.138



①増淵楡子
②エンレイソウ
③不詳
④紙 水彩
⑤23.0×30.0
⑥理学部/同大講堂前
⑦2013/12/06

No.139



①池田芳郎
②[海岸の情景]
③1964
④キャンバス 油彩
⑤73.0×91.0
⑥理学部/同本館 大会議室
⑦2013/12/06

No.140



①中根孝治
②[溪谷]
③1975以前
④キャンバス 油彩
⑤91.0×73.0
⑥理学部/同本館 大会議室
⑦2013/12/06

No.141



①池田芳郎
②アルプス景色
③1973
④キャンバス 油彩
⑤53.0×80.0
⑥理学部/同本館 大会議室
⑦2013/12/06

No.142



①池田芳郎
②層雲峡景色
③1977
④キャンバス 油彩
⑤80.5×53.5
⑥理学部/同本館 大会議室
⑦2013/12/06

No.143



①作者不詳
②初冬の黒岳
③1982以前
④キャンバス 油彩
⑤65.0×91.0
⑥理学部/同本館 大会議室
⑦2013/12/06

No.144



①池田芳郎
②バラ
③1975
④キャンバス 油彩
⑤50.0×60.5
⑥理学部/同本館 大会議室
⑦2013/12/06

No.145



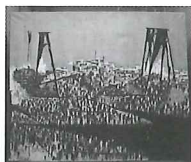
①清水康雄
②海浜のナルシス
③1961
④キャンバス 油彩
⑤53.0×73.0
⑥学務部/クラーク会館
財団事務室
⑦2013/12/20

No.146



①繁野三郎
②北大農場
③1960以前
④紙 水彩
⑤40.0×58.0
⑥学務部/クラーク会館
財団事務室
⑦2013/12/20

No.147



①Rodney Grapes
(サイン表記)
②[工業地帯]
③1975
④キャンバス 油彩
⑤138.0×167.5
⑥学務部/クラーク会館
和室A付属室
⑦2013/12/20

No.148



①長谷川雄三
②[紅葉する森]
③不詳
④キャンバス 油彩
⑤61.0×72.5
⑥学務部/クラーク会館
和室A付属室
⑦2013/12/20

No.149



①栗山俊雄
②[バイオリンのある静物]
③1958
④キャンバス 油彩
⑤46.0×61.0
⑥学務部/クラーク会館
和室A付属室
⑦2013/12/20

No.150



①董一沈
②西湖全景
③不詳
④刺繍
⑤42.0×139.5
⑥学務部/クラーク会館
和室A付属室
⑦2013/12/20

No.151



①中居定雄
②クラーク会館のために
③1961
④キャンバス 油彩
⑤33.0×41.5
⑥学務部/クラーク会館
和室A付属室
⑦2013/12/20

No.152



- ① 作者不詳
- ② クラーク博士像
- ③ 1961以前
- ④ キャンバス 油彩
- ⑤ 129.0×104.0
- ⑥ 学務部/クラーク会館
和室A付属室
- ⑦ 2013/12/20

No.153



- ① 和田三造
- ② 緞帳原画
- ③ 1961以前
- ④ 素描
- ⑤ 115.0×232.0
- ⑥ 学務部/クラーク会館
大集会室
- ⑦ 2013/12/20

No.154



- ① 作者不詳
- ② 抽象画(顔)
- ③ 不詳
- ④ キャンバス 油彩
- ⑤ 65.5×90.0
- ⑥ 学務部/クラーク会館
和室A付属室
- ⑦ 2013/12/20

No.155



- ① 内村鑑三
- ② 禁酒労働
- ③ 1930以前
- ④ 書
- ⑤ 52.0×92.0
- ⑥ 学務部/クラーク会館
和室A付属室
- ⑦ 2013/12/20

No.156



- ① 村田丹下
- ② 早春の大雪山
- ③ 不詳
- ④ キャンバス 油彩
- ⑤ 45.0×53.5
- ⑥ 学務部/クラーク会館
和室A付属室
- ⑦ 2013/12/20

No.157



- ① 日野謙夫
- ② 炎
- ③ 1962
- ④ キャンバス 油彩
- ⑤ 65.5×45.5
- ⑥ 学務部/クラーク会館
和室A付属室
- ⑦ 2013/12/20

No.158



- ① 日野謙夫
- ② 青い流れ
- ③ 1963
- ④ キャンバス 油彩
- ⑤ 81.0×117.0
- ⑥ 学務部/クラーク会館
和室A付属室
- ⑦ 2013/12/20

No.159



- ① 藤井芳子
- ② 花
- ③ 1956
- ④ キャンバス 油彩
- ⑤ 99.0×66.0
- ⑥ 学務部/クラーク会館
和室A付属室
- ⑦ 2013/12/20

No.160



- ① 小川原脩
- ② [狩獵する男]
- ③ 1955
- ④ キャンバス 油彩
- ⑤ 161.0×131.0
- ⑥ 学務部/クラーク会館
和室A付属室
- ⑦ 2013/12/20

No.161



- ① 吉野米圃
- ② 清流の図
- ③ 不詳
- ④ 絹本着色
- ⑤ 38.5×52.0
- ⑥ 学務部/クラーク会館
和室A付属室
- ⑦ 2013/12/20

No.162



- ① 上野春香
- ② 北大ボプラ並木
- ③ 1959
- ④ キャンバス 油彩
- ⑤ 53.0×45.5
- ⑥ 学務部/クラーク会館
和室A付属室
- ⑦ 2013/12/21

No.163



- ① 作者不詳
- ② [クラーク先生像]
- ③ 不詳
- ④ 紙 インク
- ⑤ 29.0×24.0
- ⑥ キャリアセンター
- ⑦ 2013/12/22

No.164



- ① 今田敬一
- ② 卓上静物
- ③ 1981以前
- ④ キャンバス 油彩
- ⑤ 100.0×80.0
- ⑥ 農学部/同図書室
- ⑦ 2014/07/22

2011年度から調査をしてきた作品の一覧を掲げた。中には照明や人物の映り込みなど、画像として不鮮明なものもあるが、資料的な価値を考え、ここに掲載した。

美術の北大展年表

西暦 美術の北大展関連事項

1876	
1877	
1885	◎藤雅三《黒田清隆肖像画》(同年 渡仏)
1886	
1888	
1891	
1895	佐藤昌介像 加藤顕清作
1901	
1903	◎林竹治郎《農学部風景》
1904	
1907	林竹治郎、第一回文展に入選
1908	北大美術部、黒百合会が創立(5月)
1909	
1910	◎S. IGASRASHI《第一農場》
1912	光風会設立
1913	◎田邊至《札幌農科大学附属農場写生》
1918	
1919	
1921	
1923	
1924	
1925	北海道美術協会(道展)創立、第一回展(10月)
1927	近藤七郎 渡仏
1928	◎J. Moreau《街角》 ◎近藤七郎《婦人像》
1929	◎H. Mastumoto《並木道》
1930	◎五味清吉《佐藤昌介肖像画》 独立美術協会設立
1935	◎阿藤秀一郎《北海道大学構内》 北海道春陽展創立
1936	◎池田芳郎《校庭》 一水会設立
1937	◎F. Nakashima《小樽風景》
1941	
1947	



疋田豊治《白壁館》
(北海道大学総合博物館 所蔵)



北海道大学関連事項

W. S. クラーク博士着札、札幌農学校開校
W. S. クラーク博士離札、農校園(北大正門付近)にモデルバーン新築
札幌農学校植物園開園
橋口文蔵札幌農学校校長就任(～1891)
佐藤昌介校長就任(～1930)
旧札幌育種場を第一農場(北大南門付近)、農校園を第二農場に改称
昆虫学および養蚕学教室新築
キャンパスを北一条から現在地の北八条以北へ移転。 ポプラ並木植栽開始
第一農場を現在の理学部北側に移転
学校が東北帝国大学農科大学と改称される
有島武郎が英語教師として北大に赴任する
モデルバーン現在地に移転増築。林学教室(古河講堂)新築
第二農場完成、ポプラ並木が現在の形となる 有島武郎が札幌を離れる
東北帝国大学農科大学が北海道帝国大学と改称される
医学部設置、農科大学本科が農学部と改称される
医学部に附属医院設置
工学部本館(白壁館)建設
工学部設置
パリ会議(理学部第一回教授会)が開催される
理学部設置
中谷宇吉郎教授が人工雪の製作に世界で初めて成功する
低温科学研究所設置
北海道帝国大学が北海道大学と改称される

西暦	美術の北大展関連事項	北海道大学関連事項
1949		国立学校設置法により新制の北海道大学となる
1954	池田芳郎教授より《北大工学部》が 北海道大学工学部同窓会に寄贈される	池田芳郎教授退官
1955	●小川原脩《狩猟する男》 ●坪谷六郎《ダリヤ》	
1956	●木田金次郎《海岸風景》 新道展第一回会展(8月) 黒百合会第50回記念展覧会(10月)	
1959	●上野春香《北大ポプラ並木》(4月)	クラーク会館建設
1960		今田敬一教授退官
1961	●中居定雄《クラーク会館のために》 ●清水義隆(原作中谷宇吉郎)《雪華図説》 ●渡辺勲《碇泊》(5月)	
1962	●小川原脩《羊蹄山》	
1963	●日野謙夫《青い流れ》	
1964	●小川原脩《工学部校舎》	中根孝治教授退官
1966	●野口明《北海道大学(低温研究所)》	白聖館を取り壊した跡に現在の工学部本館の建築が始まる
1969		モデルバーンの建築物が重要文化財に指定される
1967	●小野垣哲之助《北大風景》	
1969	●八楯利郎《旧第二農場》(8月)	
1970	●小川原脩《灯台と犬》 ●大本靖《夕日の釧路川》(～1972) 初代放射線部部长若林勝氏より、《ダリヤ》、《札幌の町》が寄贈される	今田敬一「北海道美術史 地域文化の積み上げ」 (北海道立美術館)出版
1972		白聖館が完全に取り壊される
1975	●斎藤清《稔の会津(2)》	
1977	深沢正一氏より《稔の会津(2)》が寄贈される	百年記念会館新築
1979	●高田正二郎《雪溪夏日》	
1981	●石塚常男《石狩遠望》	
1988	●八楯利郎《北大構内展望》(1月)	
1989	●美阪恵美子《深緑の頃(北大構内)》	
1992		八楯利郎教授退官
1999		北海道大学総合博物館設置
2004		北海道大学が国立大学行政法人法の規定により 国立大学法人となる 台風18号によりポプラ並木27本が倒壊
2009	第百回黒百合会展(12月)	
2011	星野精一氏より、《植物園》、《校庭》、《第二農場》、《第一農場》が 寄贈される(7月19日) 北海道大学所蔵美術作品悉皆調査が始まる	

参考文献

◎ 書籍・定期刊行物・論文

飯田市美術博物館編『「南信」新聞美術記事年表（明治・大正編）』秀文社、2011年。

五十嵐恒『北海道のアーチスト－札幌の個展にみる絵画・版画・工芸・彫刻・立体・書道』北海タイムス社、1997年。

五十嵐恒『北海道のアーチスト－作品展にみる364人の輝き』共同文化社、2009年。

石黒敬章ほか『ライブラリー・日本人のフランス体験 第1巻 バリの日本語新聞－「巴里週報」Ⅰ』柏書房、2009年。

石黒敬章ほか『ライブラリー・日本人のフランス体験 第2巻 バリの日本語新聞－「巴里週報」Ⅱ』柏書房、2009年。

池田郁雄編『池田芳郎 愛 九十有余の面影』1994年。

岡部卓・木田金次郎美術館編『もうひとつの木田金次郎』木田金次郎美術館、2012年。

五十殿利治・水沢勉『モダニズム／ナショナリズム 1930年代日本の美術』せりか書房、2003年。

五十殿利治監修『美術批評家著作選集』既刊全巻、ゆまに書房、2010年～。

今田敦一『北海道美術史 地域文化の積み上げ』北海道立美術館、1970年。

札幌同窓会編『札幌同窓会報告 第27回～第58回』札幌同窓会、1912～1935年。

瀧井三・日動画廊編『日本の洋画界七十年 画家と画商の物語』日経事業出版社、2000年。

二科七十年史編集委員会編『二科70年史』二科会・日本経済新聞社、1985年。

日本洋画商協同組合編『日本洋画商史』日本洋画商協同組合、1994年。

北海道帝國大學文藝美術部編『黒百合会回顧録』北海道帝國大學文藝美術部、1931年。

北海道大学編『北大百年1876－1976写真集』北海道大学図書刊行会、1976年。

北海道大学編著『北大百年史』ぎょうせい、1982年。

北海道大学大学文書館編『北海道大学 大学文書館年報』。

北海道大学百二十五年史編集室『北大百二十五年史 通史』北海道大学、2003年。

北海道大学美術部黒百合会編『黒百合会記念誌』（六十周年、七十周年、九十周年、百周年）。

北海道大學理學部同窓会編『理學部同窓會誌』。

北海道大学理学部同窓会編『北海道大学理学部同窓会誌』第34号、1992年。

北海道美術協会編『道展四十年史』北海道美術協会、1965年。

北海道美術協会編『道展七十年史』北海道美術協会、1995年。

北海道立近代美術館編『ミュージアム新書』既刊全巻、北海道新聞社、1992～2008年。

堀田進弥『昭和の美術 第1巻』毎日新聞社、1990年。

眞島勇雄編『續黒百合会回顧録：創立三十周年記念』北海道帝國大學文藝美術部、1936年。

山下裕二責任編集『日本美術全集 16巻 激動期の美術』小学館、2013年。

湯原公浩編『別冊太陽 近代日本の画家たち』平凡社、2008年。

吉田豪介『北海道美術をめぐる25年』軸仁書院、1983年。

吉田豪介『北海道の美術史：異端と正統のダイナミズム』共同文化社、1995年。

吉田豪介『道展・全道展・新道展 創造への軌跡（道新選書）』北海道新聞社、2005年。

50周年記念展誌作成委員会『新道展50周年記念展誌』新北海道美術協会、2005年。

奥田義正「青年寄宿舍々友會時報」第1号、青年寄宿舍々友會、1935年。

早川直瀬「故近藤七郎君小傳」『札幌同窓会第五十八回報告』所収「故人寫眞及小傳」札幌同窓會、1937年。

八銀功「池田芳郎先生を悼む」『日本物理學會誌』47 (6)、日本物理学会、1992年。

「シリーズ学内の美術その1〜25」『北大時報』1985年8月377号〜1987年9月402号。

「近藤七郎氏の洋畫展覧会」『南信新聞』1926年4月29日。

「本學出の農學士さん 近藤七郎氏個展 本學に大額寄贈」『北海道帝國大學新聞』1933年10月3日。

「珍しい家庭展」『毎日新聞』東京版、1936年5月2日。

◎ 画集・カタログ

「近藤七郎氏 滯佛作品展覧會目錄」青樹社畫堂、1931年。

後小路雅弘研究代表・伊藤絵里子編集『九州大学P&P 大学とアート ―「公共性」の視点から』九州大学教育研究プロジェクト・研究拠点プロジェクト、2008年。

木田金次郎美術館編『木田金次郎の千石場所展 岩内町町政施行100周年記念』木田金次郎美術館、2000年。

木田金次郎美術館編『木田金次郎没後40年 三人の門下生展』木田金次郎美術館、2002年。

札幌芸術の森美術館編『大本埴展 山の鼓動、樹々のうた』札幌市文化芸術財団、2007年。

市立小樽美術館編『画家たちのバリエーション』市立小樽美術館特別展実行委員会、2009年。

滝川市美術自然史館編『黒百合会の画家たち：有島武郎・今田敬一』滝川市美術自然史館、2001年。

徳島県立近代美術館ほか編『薩摩治郎八と巴里の日本人画家たち』共同通信社、1998年。

福島県立美術館編『生誕100年 斎藤清展』福島県美術館協会の会、2007年。

北海道立近代美術館編『松島正幸』北海道立近代美術館、2000年。

北海道立近代美術館編『小川原脩展 対話・沈黙―遙かなるイメージ』北海道立近代美術館、1998年。

八銀利郎『北大構内スケッチ』北海道大学図書刊行会、1992年。

◎ ホームページ

一般社団法人 春陽会 (<http://shunyo-kai.or.jp/>)

一般社団法人 太平洋美術会 (<http://www.taiheiyobijutu.or.jp/>)

株式会社 北海道画廊 (<http://www12.ocn.ne.jp/~h-garou/yusai2/b-y-m-uenoharuka.htm>)

公益社団法人 二科会 (<http://www.nika.or.jp/>)

さっぽろくろゆり会 (<http://sapporokuroyurikai.skr.jp/>)

青年寄宿舍の日誌 (<http://seinen-kishukusha.com/>)。

東京黒百合会 (<http://kuroyurikai.art-studio.cc/>)

中谷宇吉郎 雪の科学館 (<http://www.kagashi-ss.co.jp/yuki-mus/>)

北大美術部黒百合会 (<http://kryr.sakura.ne.jp/>)

北大美術部黒百合会百周年記念展 (<http://kuroyurikai.web.fc2.com/tenrankai/2008/100years-2008/100years.html>)

やないづ町立 斎藤清美術館 (http://www.town.yanaizu.fukushima.jp/bijutsu/profile_s_k_m.htm)

美術の北大展

いま、明らかに大学所蔵絵画

◎発行日

2014年10月4日

◎編集・発行

北海道大学大学院文学研究科芸術学講座
北海道大学総合博物館

◎デザイン

畠山尚、清藤麻美（畠山尚デザイン制作室）

◎撮影（p. 018－p. 059 図版）

酒井広司（グレイトーンフォトグラフス）

◎印刷

中西印刷株式会社

©北海道大学大学院文学研究科芸術学講座、北海道大学総合博物館

◎展覧会スタッフ

野田佳奈子（北海道立帯広美術館）

射場亮、梅村尚幸、大野藍子、川岸真由子、坂本真惟、高野詩織、

高橋佳苗、室谷美里、山田のぞみ（北海道大学大学院文学研究科思想文化学専攻芸術学専修）

泉谷宗達、一戸彩花、稲田浩徳、上符一也、大和田育美、黒田栞、相良真緒、佐々木蓉子、角野広海、

竹嶋康平、土田あゆみ、永谷かのこ、西田真、藤岡奈緒美、町田義敦、渡部万里鈴（北海道大学文学部）

北村清彦、谷古宇尚、鈴木幸人、浅沼敬子（北海道大学大学院文学研究科芸術学講座）

◎図録執筆

八楯利郎（北海道大学名誉教授）

柴勤（小川原脩記念美術館館長）

野田佳奈子（北海道立帯広美術館学芸員）

北村清彦（北海道大学大学院文学研究科芸術学講座教授）





THE HOKKAIDO UNIVERSITY MUSEUM



北海道大学総合博物館